

1213

滑稽贅談演說

191

瘦々亭
骨皮道人演說
妙々亭
耳野早藏筆記
於東京
共和書店發行



091684-000-2

特22-404

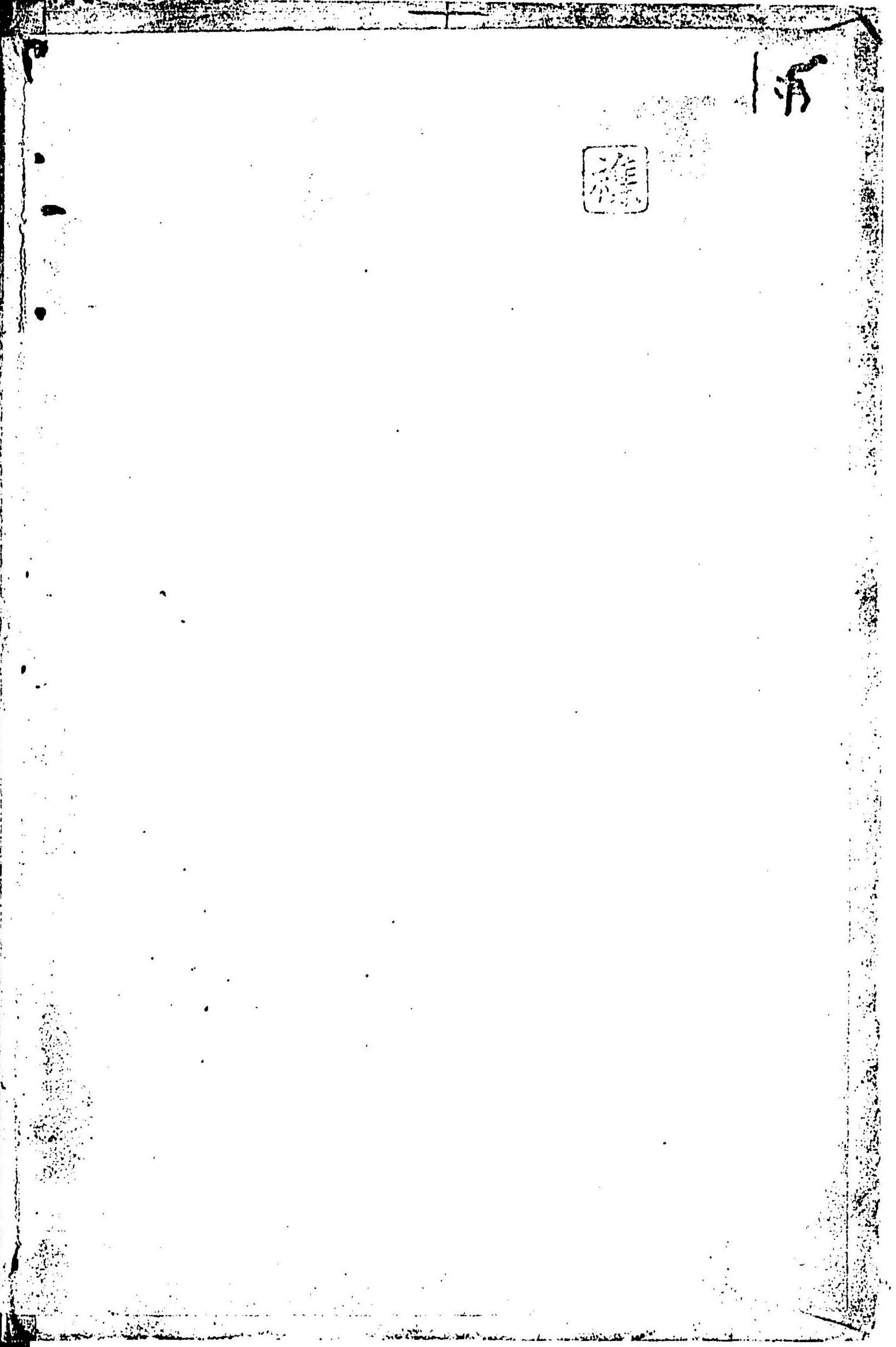
滑稽贅談演說

瘦々亭 骨皮道人/述

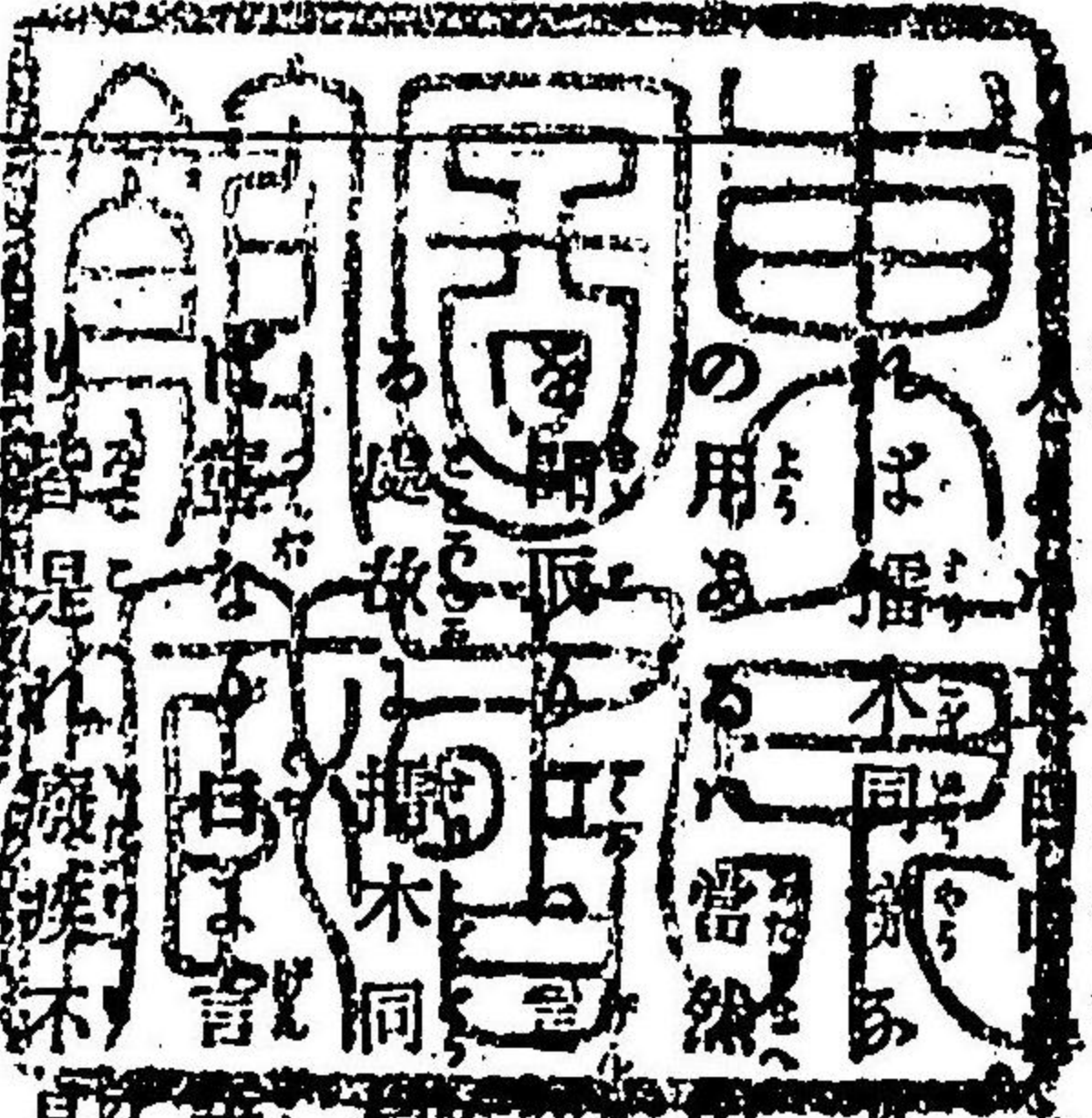
M23

DBO-0146





滑稽贅談演説の序



あり夫やア當然の事若し人にして耳目口鼻各其
 已よ耳目口鼻ある以上ハ又た其耳目口鼻各其
 の用あるハ當然の事即ち目の物の善悪を見分け耳の色々の音聲
 を發し又食を味ひ鼻の味増と糞との香を嗅分
 べ木同様に言を發せざれば玉あければ盲目あり耳開へざれ
 ば言を發せざれば舌あり鼻よ香を嗅ざれば鼻聾あ
 るは是れ病疾不具の部類ハ屬滅矣然り然る骨皮道人ハ天晴
 れ其名耳聾言身林一自覺保御と雖も幸私として人間並の耳目口
 鼻あるが故よ能く物の善悪を見分け能く色々の音聲を聞き又能
 く聲言を嗅香り大飯を食ひ又た能く味増の味増臭さと糞の糞臭
 きとを嗅なる事を知れり而して其耳目口鼻各々其役を勤めた
 る處を一網りも漏れざるもの如し此贅談演説を現れし者ハ



四
ば諸君も於しも人間並に耳目口鼻イヤ鼻の何でも宜が若し耳目
口のあるる方へ又例の通り愛讀下さるべしトの何だか譯の分
らぬい播木同様の序文なる哉

明治廿三年第二月國會開設より何日前

瘦々亭骨皮道人識



滑稽贅談演説目録

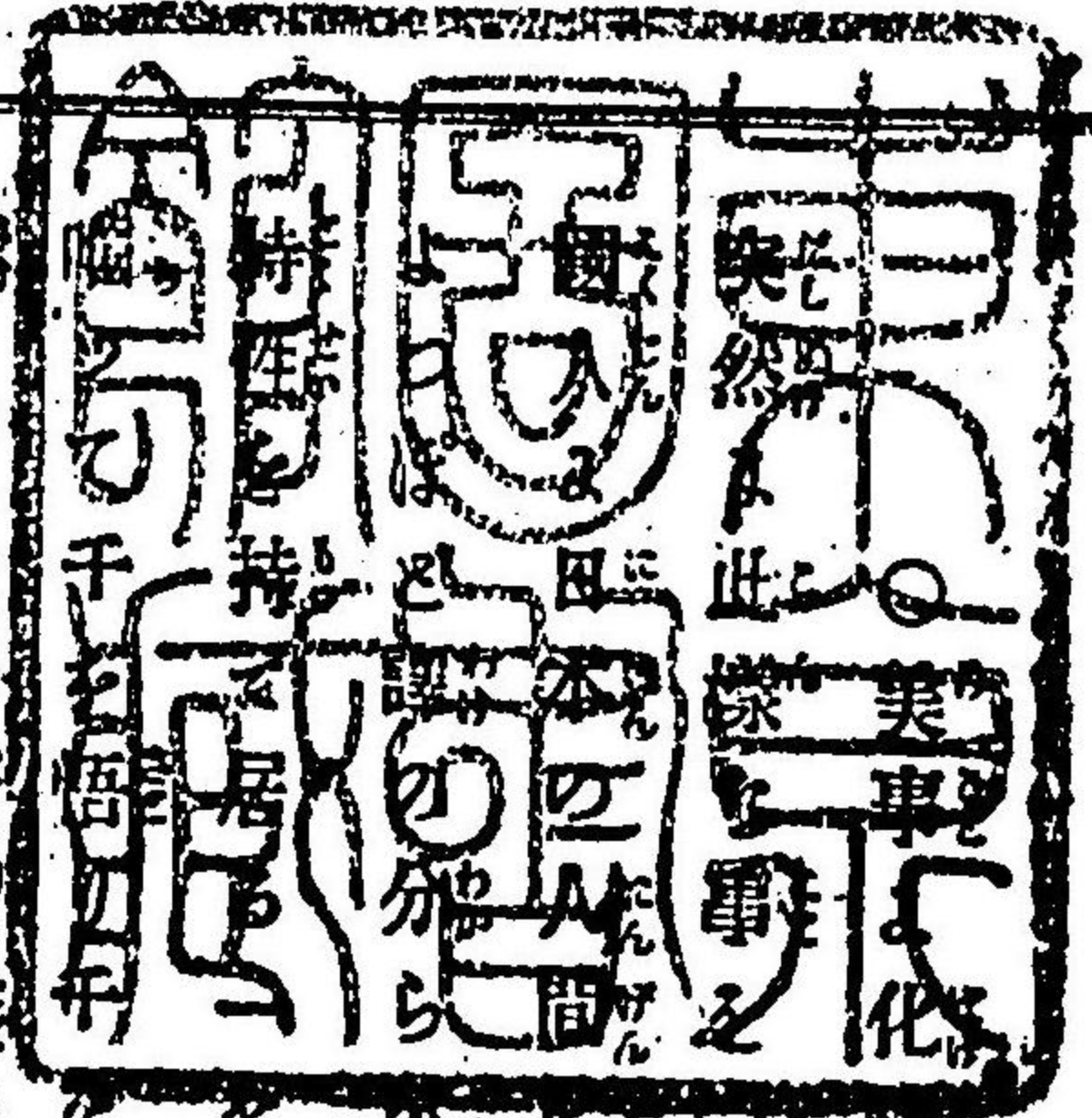
- 美事よ化變ツた
- 雪の説
- 日本の言葉を改良するの工夫
- 隠すより顯すよ如のあし
- 人の様々善悪くらべ
- 女よも様々あり
- 新聞紙の不權式
- 出物の所を嫌ふべし
- 君子よ似た君子
- 正直の説
- 相場の説
- 新刀論

- 殺生とい何ぞや
- 女郎よ鼻毛を伸す人よ釘一本
- 子供の善悪
- 小僧さん能く聞ッしやい
- 意氣地の辨
- 快愉と不快愉
- 廻り焼籠の説
- 父母の説
- 泥坊の外よ泥坊あり
- 苦栗の金銀の有無よらざ
- 釋者の法螺

滑稽贅談演説目錄終

滑稽贅談演説

瘦々亭骨皮道人 演説
 妙々亭耳野早藏 筆記



酒と云へば德利烟草と云へば煙管墨と云へば筆團子と云へば申煎餅
 と云へば袋チヤンと打附れバ脚筒ドーンと鳴れば午飯フーンと音が
 すれハ鼻を摘むなごハ日本人ハ限る其素早い事と云ッたら碧眼赤髯
 がち爲め轉しの漸進主義でヤリ、く一本ヅ、唇の毛を抜くやうあ

ものより迎も及ばぬ事だと云ふさうでは坐いますか如何様さう譽られて見ると自惚で有りませぬけれども日本人のスパシッコイは違ひは坐いませぬ實は奇妙奇手列變呆來よつぼど譯の分らぬ不思議千万合點の行ない一種類敏ハシッコイ特性を持って居るよ違ひ坐いませぬ(ヒヤ)其証據よ十分ある最も解り易い確例が坐いませぬ一寸早い話しが維新以來我々が飯を食ての寐飯を食ての寐て是まで送つて來た月日の只た二十一年イヤ二十一年と云へ共二十一年の中でも革命の誤多草騒ぎで極りの附なかつた四五五年を引去ると僅は十七八年この又た十七八年の中から死人同様よなつて骨休みをした夢現の夜と引去て見ると只の八九年で御座います此八九年と過た現今の有様と維新前よ糞葉束を頭よ戴き長刀草履を穿て威張て居た頃とを比較て見ると丸で焼芋と煉羊羹弾け豆と金米糖ほどの違ひで丁稚小僧も漢語で挨拶し兀天窓の番頭も英和玉篇と首

ツ引するやうな時節に成つて居りますから成ほど一を聞嚙つて十を悟り十を聞嚙つて百を呑込だよ相違坐いますまい古人の云つた寐言よ世の中の三日見ぬ間よ櫻哉と云ふ事が坐いますか實は世の中の遷り變りど云ふもの猫の眼玉の時々刻々よ替る如く七面鳥の頭の色々様々よ變するが如き今更ヒツシリ仰天膽玉を潰し墨玉を釣上るよ及びませぬけれども何よ致せ當時の文明開化ほど速く化變つた有様は古來大昔しから初めての事で坐います(ヒヤ)尤も兩替屋の看板と角力取の頭どの矢張り昔しの儘で化變らぬいで居りますすけれども其外の物事の化變りたる事皆よ三十日の晩よマンマルなお月様がニユツと出ると四角お金お圓くあつてコロコロ轉げるとばかりでは坐いませぬソコで其ばけ變つた事柄と品物よ依て考へて見ると以前の大層盛んであつた物が只今で見る影もなく衰へた物もあり或ひに又た昔しに見る影も無かつた物が只今で

又出て大威張の物も居坐いますすけれども併し何方かと云ふと先づ以前の大層用ひられた物が今日とあつて見る影も亦く衰へた物が十中の八九分では坐います(ヒヤ)今試み其大略を並べ立て見ますれば昔しの河原乞食だと云つて卑められた俳優も今日での教導職だとか何とか云ふ名義を貰つて出世しましたけれども是も引替へて昔しの大名のお抱へだとか天下の力士だとか云つて威張た角力取の次第も衰へて裸体踊と嘲けられ昔しの百薬の長と稱せられた日本酒も健康に害ありと屁消よせられてビールも落を取られ昔しの禮服と云つた貴ばれた羽織袴も今でのズボン、マンテルの洋服も押まくられ其外靴屋の喜んでニコくして居れど草履屋の悲しんで涙を溢し日傘の種切とあつて蝙蝠傘幅を利かせ武士の兜の植木鉢となり高帽子これ又代り刀劔の薪割よされてサアベル燿々と光り行燈は消て仕舞てランプが坐敷を照し燈し油の石炭油も追まくられ障木と火打銀の非

役となつてマツチが便利の評判を取り毛氈の隠居してケツトが勢ひを得日本服の仕立屋の洋服の裁縫よ敵はず木板の書物の宜しけれども活版の安直よ旗を揚られ飛脚屋の願を釣して郵便盛大よ行のれ駕屋の職の人力車よ奪のれ會席料理の西洋料理の勢ひよ押され魚屋の顔をしかめて牛肉店微笑を含み漢方醫者の匙加減の西洋醫者の水加減よ負け鉄道馬車開けてガマクリ馬車頭を掻き床机の腰掛の舊弊よ屬して椅子の開化風が勝を占め帆船の不便の彈かれて蒸氣船よ乘代られ漢學の然り而しての衰へて洋學のabcが流行し南無阿彌陀佛の佛法の兼入てアイメンの耶蘇教が頭を擧げ道德の何處へか飛で仕舞て薄情の人が日々殖るあど一々勘定をした日よの縦ひ一年三百六十五日の間ノベツに饒舌つて居ても逆も饒舌り切れなほど坐いかすからモウ此邊でお仕舞に仕やうと思ひますが併し是ッ切でお仕舞よして何の功能も居坐いませんから一寸一言申し添ませう

(謹聽く)ヒヤく)エヘン一言申し添るの何様事かと云ふも右の盛衰やら化變りやらの中も自分で勝手よ衰へたものもあり或ひの外物の爲め又壓倒された物もありますけれども何又致せ衰へると云ふ事の餘り宜辻占でもは坐いませんから回復しの附だけ成べく回復す事に注意しなければ成りませんと云つたか附木の衰へたのを回復せよ兎を被つて高帽子を止て仕舞と聞取られる人もあるか知りませんが道人の決して其様か野暮な事を云ふのでは坐いません唯便利なる物の何處までも便利又用の構結な事から何處までも結構な事又して置の索より差支へなき事あれと道人の心配するの彼の雷同説又引張り込れて無理又頭をさへ盛んよあらうとする者を強て衰へさせるやうな事のないやうな注注意を願ひ度のでは坐いませオツト其様な尻痴理屈を並べる場所でのあかつたッけ(大喝采)

○雪の説

雪どの何様な物では坐いませうイヤ何様な物では坐いませうさど、鹿爪らしく諸君よお尋ね申すまでの事いあく諸君とてモ人間並よ目玉があるから雪と云ふ物の色の白い物で手よ握ると冷い物で火よ煽ると融て氷よある物だと云ふ事は存じで坐いませう成ほど雪と云ふ物の色の白い物で手よ握ると冷い物で火よあぶると融て水よなる物よ違ひないケレども只白い物だ冷い物だ融て水よある物だと云ふばかりで何故よ白いか何故に冷いか何故に融ると水よあるかと云ふ物の道理即ち其所謂因縁の理合と云ふ物を突留なければ何の益も立ません故よ道人が一寸手短又雪の講釋をしてお聽せしませう(謹聽く)エヘン扱て抑く 全体一体冬よなると此天地の中何處でも皆寒くあります其の寒くなるよ伴て丁度溝の水が凝るやう又空でも天の川が固アく凝て仕舞ますソコで雨を降せる本元の天の川が凝ッて仕舞て見ると此人間世界の氷が無くありますから其處に殺す神

ありや助ける神天道の人を殺さずで天の川の近邊も慈悲深い人が居てア、斯どうも水が凝っての定めし人間世界で困るだらうと云ふ處から態々大きな鉋を製造へて彼の天の川の氷をかりくくくと削って落すのが即ち雪で坐いますイヤ常談の扱置て是から本當よお話しを致しませうエヘン雪と云ふ奴も色々物の引合よ出される白物デハナイ代物で士百姓の曰くクレハ權右衛門どんや今年やア六層雪が降から急度豊年だんべと是の寒中よ澤山雪が降れば土の中よ潜り込で居る毒虫が獲らず死で仕舞て五穀や野菜物の出來が宜からで御座います又た御隠居様曰く雪の太平の前觸だとは是の寒中よドツサリ雪が降れば其年の氣侯が規則通りよ行て虎列刺などの心配が少ないからで御座います此故よ毛唐人の雪を以て瑞祥と爲し赤鬚親父の雪を指して良薬と爲し又た山邊赤人の田子の浦よ飛出して富士の高根よ雪の降ッ、と詠み光孝天皇の我衣手よ雪の降ッ、と

宣まひ其角の我物と思へば輕し傘の雪と云ひ骨皮道人の我物と思へど重し下駄の土と云ひオット是の雪の縁があるが昔し安藤何某の雪の日やあれも人の子樽ひろひと云ひ又た西鳥と云ふ俳諧師の女房の我子おら供よつれと夜の雪と云ひ又た花語家の前坐の初雪やせめて雀の三里までと云ふ句を真似して初雪やせめて駝駝の股たぶらまで初雪や是が鹽から金儲けと云ひ又た初雪や二の字踏出す下駄の痕と云ふのを真似して初雪や大坊主小坊主が一所よ轉んで頭の足痕瓢箪かゝると云ひ又た葉唄よの雪の巴よ降り頻ると云ひ又たアレ見やしやんせ此雪よと云ひ又た菅原天神記よの似ても似附ぬ雪と墨とあり又た唐人の屁痴堅い詩よの香爐峯の雪の籠を掲げて看るとあるおど雪の掛り合の随分澤山よ御坐います是でい未だ云ひ足りませんから一寸氷を一杯飲で愈く種が無くなつて雪止りよあるまで申し述べませう(ヒヤ〜謹聴〜)エヘン扱て前よ引續いて雪の掛合を生捕ま

すれば昔し毛唐人國の車胤と云ふ人の雪を燈花よして書物を讀だが
 爲る學者の評判を取り孟宗の雪の中から竹の子をホチクリ出して孝
 子の名を得赤穂の義士の雪に乗じて吉良の首をチヨン切り飯沼勝五
 郎の箱根の雪に依て灘口上野を討取り道樂息子の朝の雪を口實とし
 て居續けを極込と稲妓の窓の雪を僥倖として可愛い男を引留め比良
 の暮雪の近江八景の第一は居り圓山の雪の西京四季の景氣の殿は位
 し北越の雪の擔を以て春日の賑ひを來し駿府の富士の雪を以て景色
 又誇チラく雪のお嬢さんの前垂又納つて其心を慰さめベヌく雪
 の坊チヤンの手製よかゝりて遠磨と變じ車挽の雪を見て車賃の増を
 望み奥州の雪饅頭他國の人をして舌を巻じめ松前の雪の塊の東京
 人をして暑を忘れしめ別嬪の色白きを雪の肌と云ひ砂糖の上等を雪
 白と云ひ伊達宗雪の原田甲斐の反逆を破毀して國家を平げ雪姫の松
 永大膳の密計を探つて秀吉を助け貞婦は深雪あり俳諧の宗匠は嵐雪

あり齒磨きよ雪の梅あり干菓子よ花吹雪あり昆布に湖雪昆布あり豆
 腐は笹の雪あり紋の名よ雪輪あり臭い處よ雪院あり是等の皆を喜ぶ
 べし樂むべきの雪よして吉相極まる雪で座いますけれども是との
 反對にして悪い雪を云て見ませうから魯西亞境の大雪山の佛蘭西帝ナ
 ホレオンをして困難は陥らしむるよ基とあり櫻田の大雪山の伊井掃頭
 殿をしてソツ首を飛ばしめ伊賀越のお谷の雪よ埋まつて涼へ死の中
 將姫の雪よ責られて無實の罪よ落ち岩見重太郎の雪よ紛れて敵き大
 川八左衛門を取り逃し佐野源左衛門の雪よ依て大切な鉢の木を斫り
 袖萩の雪の中よ坐つて三味線を弾き深草の少將の小町よ鼻毛を伸し
 て雪の中よ倒れ佐倉宗五郎の雪の晩よ妻子と別れ加古川本藏の雪の
 戸を叩いて力彌よ突止られ伏姫の雪を肩よして犬の八房よ伴あひ山
 本勘助の雪よ迷ふて猪の爲よ不具とあり早瀬伊織の雪よ冷されて足
 痿とあり浦里の雪空よ縛られて殆んど絶命よ至り常盤御前の雪の道

よ迷ふて宗清は逢遭し叛逆人よ由井正雪あり毒婦よ雪の谷あり醜婦
 の化粧を芥溜の雪と云ひ老翁の白髪頭を地獄の雪と云ふなど是等は
 即ち悲しむべく思ふるべきの雪で坐いまして決して吉相や瑞祥で
 は坐いません(ヒヤク)併し右に並べ立ました處の善悪も就
 て差引勘定を附け見ますると喜ぶべく樂しむべき雪の方が多くあり
 まして悲しむべく思ふべきの雪の甚だ少なふ坐いますから成ほど
 雪と云ふものの豊年の印し吉相の前觸と云ふも強がら出鱈目で無
 からうと思ひます處から一寸雪の説と題して雪の文句盡しのやうな
 雪の番附見たやうな一説を申し述べました(大喝采)

○日本の言葉を改良する工夫

諸君よ彼の豚尾坊主の國の昔し話し鳥の鳴聲を通辨したと云ふ公
 治長や又た明の時天竺よ出た角端や又た日本の國で只今寄席の稼ぎ
 をして居る猫八の如きの扱置て凡そ人間の詞ある者の上にお歴々の

お方々より下の種蒔の樞兵衛太郎兵衛大工の熊公八公館賣のヨカク
 大道に店を張て是れ是れ西洋のカタの鍍金と饒舌り立る小商人よ至
 るまで我が思ひを述べ我が意を發して其事柄を口から耳へ傳へるも
 ので御座いますから其種類の澤山ある事と云つたら實は天上の星の
 如く地中の砂の如く色々様々種々雑多で逆も勘定の出来ませんけれ
 ども先づ其重立た處を云つて見ますれば歌ともあり詩ともあり堅ッ
 苦勞しい文章ともなり和らかな狂文ともなり臍を抱へる狂歌ともな
 り腮を外させる狂詩ともあり悪口を云ふ川柳ともあり人情を穿つ都
 々一ともなり或ひは俳諧ともあり葉唄ともなりトツチリトンともあ
 り清元ともなり富元ともあり常盤津ともあり新内ともなり一中節と
 もあり加藤節ともあり長唄ともなり大津繪節ともあり義太夫ともあ
 り或ひは役者の似聲ともなり軍談師のエイノンノともなり落
 語家の扱ひや代り合ましてともなり見世物師の入ッじやい〜とも

なり機關鏡のユ、お寺さん、駒込の吉祥寺ともなり阿房多羅坊主の
 ヲ、一恐れながら勿体ながらともなりテロレン祭文が皺枯壁を出し
 て云ふ幡隨院の長兵衛ともなり或ひの坊主の南無阿彌陀佛ともなり
 或ひの神主の登加美ともなり或ひの耶蘇のアーメンともなり或ひの
 上品又言へば天子様の詔ともなり内閣の會議ともなり或ひの新聞の
 社説ともなり或ひの雜報ともなり或ひの芝居の筋書ともなり或ひの
 民権家の演説ともなり或ひの書生の討論ともなり或ひの裁判の宣告
 ともなり或ひの巡查さんの説諭ともなり或ひの情男の口説ともなり
 或ひの親父の小言ともなり或ひの車夫の喧嘩ともなり或ひの女房の
 焼餅ともなり或ひの借金取の掛合ともなり或ひの圖部六の管巻とも
 なり或ひの貧乏人の泣言ともなり或ひの女郎の無心ともなり或ひの
 藝者のお世辭ともなり或ひの辯問の洒落ともなり或ひの權妻の口車
 ともなり或ひの奥様の愚痴ともなり或ひの忠臣の諫言ともなり或ひ

の佞臣の諂言ともなり或ひの小僧又食せる劔突ともなり或ひの三
 どんの寐言ともなるなど其類より其言語も違ひますけれども亦た
 國所よよつて其稱呼の違ふ事が御座います(ヒヤク)即ち暗の夜、河
 岸或ひの路次又立て人の袖を引張り例の物を切賣するを東京での夜
 鷹又の私窩子と云へど西京では辻君と云ひ大坂での白湯文字と云ひ
 中國筋での双家と云ひ又た所又依てのウシとも云ひ或ひのサルンハ
 とも云ふなど其の稱呼の色々違へど其實の一ツ物で御座います併
 し夫のヤア双家と云ふが辻君と云ふが又のウシと云ふがウマ
 と云ふが其様事何でも宜しい骨皮道人あどい些とも御用の無
 い事だから宜しいが(ソウ)肥前邊りでの有ものをナイと云ひ加州
 邊での好きものをイヤと云ふおどの丸で通常の言葉との反對で其害
 も亦た甚だしいでの御座いませんか(ヒヤク)其他難波の芦の伊勢の
 濱荻奥州で父母をマア、ガマア虚言を突ぬの赤腹を垂れ申さん前よ

垂のあるのと無いのとで越中と香との別あるが如く皆所々よつて種々の言葉が御座いますから東京の人の長崎の人は語る事が出来ず大坂の人の奥州の人と話しをする事が出来ないやうな有様で御座います。此の區々たる日本の中で通辨が無ければ十分な話しが出来ないとい實は不都合千萬殊ふ。又た此節となつては我朝一子相傳の太和詞となれば支那詞もあり或ひは英語もあれば佛語もあり或ひは坊主詞もあれば辯問の洒落詞もあつて恰かも雑炊の如く恰かも芥溜の如く恰かも五目酢の如く恰かも生酔の嘔吐の如きものを以て一種無類の通用言葉として居るに至つては實に不規則不條理不都合不釣合不揃ひ不適當の至りでの御座いませんか(ヒヤ〜)尤も是の道人が餘計な心配をするまでの事もなく文部省でも此ふお氣が附れて日本文典ある書物を製へられ西洋の規則は基いて詞を八種に分ち其異同を審らかよし其誤謬を正された事が御座いますけれども何れ致せ車挽

や馬丁や裏店の熊八連で田舎の芋畑治郎などの素より文字も知らず又た意味も解りませんから東京と大坂と長崎と松前との言語を同じやうにする事の出来ぬのの一尺五寸の赤坊も五尺の大人も能く知る所では坐います(ヒヤ〜)依て道人の考へよ今日本國中何様な田舎の山の中でも小學校があつて鼻垂小僧を教へるの時では坐いますから其教師たる者が能く氣をつけて子供の誤謬を正して薩摩のクヤ〜や長崎のハツテン等を他人に通用させぬやうに仕ました。あらば彼の言葉は此に通じ是の言語も彼に通じて至極宜くなるだらうと思ひますが如何なるもので坐いませうか(大喝采)

○隠すより顯すよ如いなし

百人一首の中平の飯盛と云ふ名前で「忍ぶれど色も出まけり盗み酒何處で飲だど人の問ふまで」と云ふ歌が坐います。何事によらず隠して事をするだの内所で何するだのと云ふ事の甚だ宜しくない事では

何様な旨く事を取扱ッても内所の事の直し知れて仕舞いもので坐
 います其證據よの彼のお染をば覽あさい丁稚の久松と粘着てお腹が
 ポテレンとなつた時よコッソリ内所で腹帯をびて居たの宜が昨夜
 の風呂の上り場で此腹帯を母さんが見附しやんしてコレ娘と云ふ騒
 動が持上ったでいひ坐いませんか又た重次郎がコッソリ内所で討死
 よ出やうとした時よ初菊の遠くの昔しよ之を聞附て夫の討死遊ハす
 を妻が知らいで何とせう二世も三世も女夫ぢやと思ふて居るよ情あ
 いと袖よ縫り附れたので流石の重次郎も閉口したでいひ坐いません
 か(ヒヤ〜)然だから隠れたるより顯るゝゝ如ずで何せ知れるものあ
 ら隠して事を仕ない方が宜しよ坐います或處よ一人の番頭が坐
 いました毎日〜帳場格子の中よ坐ッて煙草を口よ脚へ眼玉をヒ
 カーリ〜光らかして店の八方を睨み年を経るよ従ッて横着の毛を
 はやし常よ苦虫を噛み潰したやうあ小六ケしい顔色をして「コリヤ長

松又た居睡りか眞晝間から何の事だ……喜八どんやお前ハモウ番頭
 の敷も入りあがら焼芋の買ひ食ひと何した物だ本當よ呆れ返る
 ぢやあいか……權助や店の前よ馬糞が殘ッて居るぢやあいか貴様の
 掃事ハ下手按摩の療治のやうに唯ソツと摩ッて置ばかりだから困
 ナト氣を附るが宜ト小言の敷々並べるけれども裏と表とハ大違ひで
 其裏を覗て見ると向ふ新道の寐兒を親猫ぐるみ飼て置て月々幾何か
 の手當金を仕送ッて開さへあれば珍々鴨の樂みとハ知らぬ佛の主人
 こり宜面の皮で浮坐います(ヒヤ〜)某時の事でしたが其番頭さんが
 例の通り鼻の下を長アくして出掛ると寐兒且那エ妾やアしべらく
 何處へも行ませんから近日の中是非何處へ連れて行て頂戴ナ自家よバ
 かし居るとソサ〜しますからサ番頭ム、宜らうぢや主人よ知れ
 ると大變だから人の往來い凄しい處へ出掛やうエ、ト向島に仕やう
 かイヤ向ふ島よハ店の親類があるから劍呑だハテナ目黒が宜か知ら

ドッコイ目黒よの店の出入の糞取が居るから危険しト云ツて芝居の
 猶更なりサアうつかり歩けいと云ふも不自由なものだノウ 寐見
 夫ぢやア旦那斯るさいナ彼のねへ一八さんと三八さんとを連れてズツ
 と離れた王子へ出掛やうぢやア有りませんかソレ彼の王子よの紙漉
 場が出来て皆さんが態々見物又往ますし夫して妾もお稲荷様へお願
 がありますからサ 番頭成ほど此奴ア素的の妙案だ夫ぢやア爾と極
 やう爾と極た處で何日が宜らう……ム、ム、ム、明後日の先の主人
 の年回で代り番交又休みよなるから朝の中よ店へ出て正午から出掛
 ると仕やうト話しがスツカリ纏ツて其日よなると附間が二人よ野良
 猫が四疋總勢十人ばかりで万代橋を渡りお成道を経て上野黒門通り
 から山下を右へ取て池の端へと差し懸りました處生憎と主人の何某
 と朝早くも駒込の菩提寺へ佛參をして歸り途池の端へと遣て來る處
 へ出ツ交しましたスルト 丁稚は目が早いから 丁稚旦那く 向ふか

ら來るのをば覽あさい左の手で着物の前を取つかまへてピタくさ
 して居るのが藝者で黒の羽織をベロくさして居るのが附間シテ眞
 中のお石縮緬の小袖よ南部縮緬の羽織を着て胸よ金剛の時計をピカ
 くさして居るのがテツキリ旦那でせう 旦那ム、さうかも知れん
 彼様お遊びをするよの安く積つても五十圓の掛るだらうが流石に東
 京の東京だけ有て豪氣ある者もあるノウと話しをしながら來ると丁稚
 のヒツクリして 丁稚ヤア彼れの家よ番頭の長兵衛さんだ是の魂消
 たもんだ彼の六ヶ敷屋の隊長がある酒落をするたア本當よ人の見
 掛よ寄らさいものでスねへ旦那 旦那馬鹿を云へあの石部金吉と特
 んで置く長兵衛が彼様を馬鹿を真似をするものかト云へ爾云はれ
 て見れば能く似て居るやうだと能くく眼を磨ツて見ると如何よも
 番頭の長兵衛らしいから是やドウしたら宜らう若し突當つたら彼も
 面目を失ふだらうがト云ツて左の山右の池外さうよも外されずと思

案モチくする中、此方の長兵衛も遠目に見てピツクリするの仕
 けれども同じく避るゝ路がないから見すく互に突當ると長兵衛の
 一足跡へ退いて番頭「コレは旦那も久し振では座いたしました 旦那コ
 レは長兵衛お前の氣でも違ひのせんか毎日朝晩又顔を見合せ
 て居りながら久し振どの何の事だ 番頭「イヤ旦那面目もは坐いま
 せんモウ此處で逢たが百年目と（ヒヤ）扱是の馬鹿氣多やうな話し
 では坐いますすが是が即ち隠れたるより顯はるゝと云ふ儘を證據で
 坐いますから悪い事の必らず仕あいやう又た人を使ふ主人たる者
 も能く氣を附あければ成らぬ事では坐います（大喝采）

○人の様々善悪くらべ

諸君よ人の了簡方の其面附の違つて居るほど各自の違つて居ると云
 ひますが成るほど十人寄れば十色で其面附の違つて居るほど了簡方
 も違つて居ります即ち猫見たやうな柔和な人もあれば虎見たやうな

我武者の人もあり或ひの酒を飲で怒る人もあれば團子を食て笑つて
 居る人もあり或ひの毎日握り墨玉をしてソソく遊んで居る人もあ
 りば或ひの夜晝の差別なく眞黒な成てセツくと稼ぐ人もあります
 が善人の其人によつて善悪のある所をサツと勘定してお聞よ達せ
 やうと思ひます尤も只人と云つたばかりでの男だか女だか分りませ
 んが女の方の先づ跡廻しとして此處での男の事よ就て申しませうソ
 コで又た善と惡とを一所よ云ふと味噌も糞も誤多交もありますから
 先づ善の方を先よ並べて惡の方を後で云ひますから諸君のお積り
 でお聽を願ひます（謹聴）エヘン人よ取て善と云ふ人の種類を並べ
 て見ますれば第一兩親を孝行をする人其次の飯米を澤山よ買込で置
 て不自由を仕あい人其次の自分の家業を精出す人其次の我子の教育
 をよくする人其次の息子よ身所を譲つて自分の安樂よ暮す人其次の
 儉約を第一よして餘計な贅澤を仕あい人其次の寐酒を飲で機嫌よく

寐る人其次の奉公人を取立て店を出させる人其次の身の養生をよく
 する人其次の酒を飲で機嫌上戸の人其次の女房子や奉公人よ手當の
 宜い人其次の我女房を堅く守って居る人其次の下女や乳母の据膳よ
 手を出さぬ人其次の用が濟ば自家へ歸つて飲食をする人次の次の胸
 算用の早い人其次の家内の者へ新聞を讀せる人次の困窮人よ惠
 んで遣る人次の次の穢く買て奇麗よ賣り拂ふ人次の次の三度の食事
 の外の無益食をせぬ人其次の何事も隠びんに濟せる人次の次の借金
 をしても奇麗よ返す人次の次の朝早く起る人其次の家事の取締を能
 くする人其次の拭き掃事の好きな人次の次の人の噂をしをせぬ人そ
 の隣の女房も共よ稼がせる人その次の智よ來た家を能く守る人次の
 次の酒の香ひを嗅の嫌と云ふ人其次の家内の和合するのを願ふ人
 其次の身分相應の粧をする人其次の正直かのを好む人次の次の閑の
 ある時の書物を讀む人其次の粗末る食物を掃はぬ人其次の義理の子

を大事よする人其次の生物を無暗よ殺さぬ人其次の商賈が好で閑を
 惜がる人其次の堪忍のつよい人其次の木綿物を好む人其次の女郎買
 や藝者買の嫌ひも人其次の子が無くして身内から貰ふ人次の次の他人
 の家へ行て長尻をしない人其次の柔和よ見へて腹の中のシツカリし
 て居る人其次の借金のあい人其次の物を知つて居ても知らない風
 をして居る人其次の生意氣を言葉を遣ぬ人其次の火の元を用心す
 る人次の次の人よ喧嘩を賣掛られても逃して居る人其次の勝負事の嫌
 ひな人其次の骨皮道人の著書を好んで讀む人オット是れは負だが先
 づ善の方の此位よして置て夫から今度の悪の方を並べ立ませり(ヒヤ
 ー)謹聴(一)エー悪の方といつた處が泥棒や人殺しの算盤の外と
 して平生よ心掛の善あいな人の種類を云つて見ますれば先づ第一の自
 分の息子よ異見を云はれる人其次の兩親の死ぬのを待て居る人其次
 の養子先の家名を滅茶(一)に打潰す人その次の次の妻子を置去よして逃

亡する人其次の下女の親は訛證を取れる人其次の女房を追出して女郎を跡へ入れる人其次の讀書も算盤も何よも知らぬ人その次の天窓を光らかしめるから浮氣をする人其次の三十日くくも逃て家も居らぬ人其次の摘み食の好きな人其次の公事出入の好きな人其次の借た物を貰った物と同様と思つて居る人其次の女房も稼がせて自分のノツく遊んで居る人其次の男の癖に怪氣の深い人其次の年若な癖よ爺むさい人其次の圍の物をして置いて自分の家の道具をソソく運ぶ人其次の遊藝も疑て家業も怠ける人其次の自分の飯を食て人の假座を遣ふ人其次の朝からヘレケ又酔拂ふ人其次の諂諛を遣つて時々味増をつける人其次の夫婦で喧嘩をして近所も迷惑をかける人其次の自分ばかり旨い物を食て女房子よの構ぬ人其次の女房の連子を口説人其次の何事として直も飽る人其次の物事を直も忘れて仕舞ふ人其次の自分の事の棚へ上て置いて人の事を無暗も悪く云ふ人其次

の生半熟は開嚙つて間違ひだらけの漢語や洋語を遣ふ人其次の我子か人と喧嘩して勝たのを譽る人其次の年寄を理屈詰として喜ぶ人ト先づ此位にして置いて今度の馬鹿の種類を少々ばかり申し述べせう尤も善悪くらべと演題を掲げて置かから馬鹿が飛入又這入てハチト約束違ひのやうでい座いますけれども是ハマア新聞で云へば附録のやうな物と承知を願ひます(ヒヤク)ソコで馬鹿の種類は於て第一の自分の女房を後家として見度と云ふ人其次の女房の飲む酒を買に行く人其次の間男も逆捻を食つて訛を云ふ人其次の我女房も訛をして家へ歸る人其次の女湯を覗いて長湯をする人其次の自分の女房を矢鱈も譽る人其次の鼻毛のメント伸た人其次の吊ひも行って居續けをする人其次の酒を断て味淋や焼酎を飲む人其次の身代限りの掲示を高聲して讀む人其次の薬が呑よくひととて澤山も水を混て飲む人ト先づ此位よしてお仕舞も致しませう(大喝采)

○女も様々あり

諸君よ道人の前題よ於て男の善悪から馬鹿の評判までを云ひ盡しました。が只男の事を云つたばかりで女の事を黙して居ると何だか道人が助平で女の機嫌を取るやうにも思われるし又た女と云ふ者の兎角は自惚の強ひものだから自己よ何れも云ふ處がないと天狗も成られても困りますから今度の女の方の善悪を並べやうと思ひます。尤も女と云へば人の女房と娘ばかりてゐない齒の扱た敏苦茶のお婆さんも女の中で居坐いますけれども何も其様のお婆さんを取捕へて兎や角と云ふでもありませんから道人のお婆さんのヌキよして細君とお嬢子さんのお胸を少々ばかり申し述べる心得で居坐います(ヒヤ〜謹聴〜)ソコで細君も上等の細君と下等の細君とが居坐います。イヤ是でい未だ言葉が足りないが道人の上等下等と云ふの奥様と山の神とを云ふのでい居坐いません。是れ奥様と山の神と拘へらず了簡方の

宜の上等と了簡方の悪いのを下等とするので居坐います。から其お積りでお聞取を願ひます。扱て上等の細君を並べ立て見ませう。から先づ第一が貞操の正しい細君其次の何事も主の差圖を請てする細君其次の人よ愛想の宜い細君其次の家を大切守る細君其次の朝起をする細君其次の人の善悪を云ぬ細君其次の物柔かな細君其次の無益錢を遣ぬ細君其次の餘計な饒舌りをせぬ細君其次の主の氣よ逆ぬ細君其次の筆筆を能くする細君其次の儉約よ注意する細君其次の火の用心を大切よする細君其次の食物を好まぬ細君其次の物見遊山を好まぬ細君其次の主を怒らせぬ細君其次の親類へ能く交際をする細君其次の絲竹の道を忘るゝ細君其次の先妻の子を大切よする細君其次の近所交際の宜き細君其次の情け心の深い細君其次の留守を能く守る細君其次の物事よ内場を細君其次の下女よ仕事を教ふる細君其次の手ばしこい細君其次の嫁よ來た時を忘れぬ細君其次の人を

うらさぬ細君其次の主の不身持を異見する細君其次の勘辨の強い細君其次の裁縫を能くする細君其次の子供よ讀書を教ふる細君其次の無理事云ぬ細君其次の子供よ行儀を能く教ふる細君其次の奇麗好の細君其次の線臍を溜ぬ細君其次の洗濯をよくする細君其次の食物を粗末にせぬ細君ト先づ是等が上等の細君では坐います(ヒヤク)未から今度の下等の細君を柳卸を仕て見ませうなら先づ第一が亭主を尻よ敷く細君其次の舅姑を粗末よする細君其次の針仕事の出來ない細君其次の子供を教育せぬ細君其次の大酒を飲む細君其次の無暗よ焼餅をやく細君其次の洗濯物を打棄つておく細君其次の小鍋立の好な細君其次の芝居や寄席の好きな細君其次の流行物を好む細君其次の近所遊びをする細君其次の主の留主よ寐て居る細君其次の差し出口をする細君其次の口返答をする細君其次の手前勝手手の細君其次の他所の亭主を譽る細君其次の人中でマチャクチャ饒舌る細君其次の媒

始人よ度々世話を焼せる細君其次の錢遣ひの荒い細君其次の自分の亭主を悪く云ふ細君其次の人の中口を云ふ細君其次の役者の話をして暗嘩をする細君其次の亭主よ盛所の手傳ひをさせる細君其次の子供をだし遣つて出歩く細君其次の人使ひの悪ひ細君其次の親里を譽る細君其次のソツサイお細君其次の夜歩行をする細君其次のソツカンイ細君其次の寐相の悪い細君其次の買食の好きな細君ト是で先づ細君の噂の仕舞よして是から娘さんの評判よ移りませう(ヒヤク)エヘンお娘さんの善悪を並べて見ませうなら善方の第一が身の慎みのよい娘其次の繼母を大切よする娘りの次の針仕事を勉強する娘其次の親類で請のよい娘其次の物數の云いぬ娘其次の奉公人をいたわる娘其次の起居のしじやかな娘其次の親の手助けよなる娘其次の朝起をする娘其次の友達交際の宜い娘其次の習ふた事を忘れぬ娘其次の何事も内場な娘其次の寐顔を人よ見せぬ娘其次の驕

奢をせずよ身持のよい娘其次の讀書の出来る娘其次の流行物を好まぬ娘其次の人の善い事を見習ふ娘其次の喰事の細き娘其次の小遣ひを溜て置く娘其次の商賣よ心がけのある娘其次の人よ接抄のよい娘其次の小ざれを上手よ遣ふ娘其次よ洗ひ溜さの早い娘其次の人立の處へ行ぬ娘其次の履物を減さぬ娘其次の口を閉めて笑ふ娘其次の髪飾りよ贅澤を云ぬ娘其次の戸障子の開閉を静よする娘其次の何事も素直な娘ト先つ是等が上等の娘で座います(ヒヤク)夫から今度の悪い下等の方を並べて見ませうなら第一が遊藝よ凝る娘其次が親よ向つて口答へをする娘其次の俳優よ岡惚をする娘其次の學校へ行て芝居の話をする娘其次の藝妓よ成りたがる娘其次の男好の娘其次の嫁入を嫌がる娘其次の權妻を羨ままがる娘其次の母親よ友達のやうよする娘其次は父無し子を産む娘其次は萬事よ氣儘な娘其次の女郎の眞似をしたがる娘其次は高慢な事を饒舌る娘其次の親の意見と

聞入ぬ娘其次の男と肩を並べて饒舌りながら歩行く娘其次にてん屋物を食たがる娘其次の人力車で飛歩く娘其次の尻馬よ乗る娘其次の稽古をメツよ遣つて遊び歩く娘其次の男をらみをして縁の遠き娘其次の洒落た風を好む娘其次の有たけの物を着たがる娘其次の來る人を覗く娘其次のツハとして氣の定まらぬ娘其次の手癖の悪い娘其次は不性よ返事する娘其次の人の愚弄を眞よ受る娘其次の人の話しを聞て愒氣をする娘其次の流行唄よ疑る娘其次の大笑ひをする娘其次の髪結よ無理を云ふ娘其次の女の覺へ可き藝を嫌がる娘其次の寄合て男を愚弄娘其次の物の見に先だつ娘其次の人を指さして誹る娘其次の針仕事よ尻の落付ぬ娘其次のいろはのいの字も知らぬ娘ト先づ此位でお仕舞よして今度の三どんの善悪を少し申し述べせう(ヒヤク)エヘンお三どんの善悪を云つて見ますれば上等の方の第一が主人を大切よするお三どん其次の給金を溜て親へ送るお三どん其

次の内儀さんの片腕も成て能く働くお三どん其次の臺所を奇麗にし
て置くお三どん其次の閑さへあれば針仕事をするお三どん其次の惣
菜の安積りをするお三どん其次の食物を粗末もしないお三どん其
宿下も行って早く歸つて来るお三どん其次の傍輩を痛はるお三どん
其次の洗濯も精を出お三どん其次の自分で髪を結お三どん其次の
け日向をせぬお三どん其次の居睡りをせぬお三どんト是が先づ上等
の方で夫から下等の方を云つて見ますれば第一が主人よ口返答をす
るお三どん其次の親を遣こめるお三どん其次の尻のづるいお三どん
其次の物見好のお三どん其次の小遣ひを無暗に遣ふお三どん其次の
門口へ兄の逢ふ來お三どん其次の主人の事を悪く云お三どん其次の
摘み食の好お三どん其次の主人の尻馬に乗てベチャメチャ饒舌る
お三どん其次の一寸した事をも腹を立て脹れ面をするお三どん其次
の尻の重ひお三どん其次の主人の子を粗末とするお三どん其次の使

ひの通いお三どんト先づ此位でお仕舞も致しませう(大喝采)

○新聞紙の不權式

諸君よ諸君も存じの通り新聞紙も色々坐います即ち大新聞も
あれば小新聞もあり又た其新聞紙よりて自由主義もあれば改進黨
義もあり大同主義もあれば自治主義もあり保守主義もあれば國權主
義もあり又た能く賣る新聞もあれば又た岡目から思ふほどに賣ら
ない新聞も坐います然れども能く賣ると賣ないとの一々其新聞社よ
這入て實際を見なければ斗尾向が何だか確よ分らず好んば能く分
つて居たよ致せ其様を此處に擔ぎ出してお饒舌りをした處が何
の功能もあいな事では坐いますから其内幕話しの扱置て先づ新聞紙よ
大小の別ある事からソロトくお饒舌りを致しませう(謹聽)エヘ
ン諸君よ新聞紙よ大新聞と小新聞との二種が坐います是の全体
政府から定められた名前では坐いませうかイヤ決して爾では坐い

ませんナせとあらば新聞紙條例を見ても其外のは違しを見ても唯新聞紙くゝとあるばかりで大新聞の如く小新聞の云々と別段又區別も何よも多坐せせんから決して政府から區別を立られた譯でなく只世間一般の人々が彼れの大新聞だ是の小新聞だの名目を附ましたもので之を堅苦勞しく云つて見れば即ち社會の輿論公評から成立た名稱で多坐います(ヒヤ〜)ソコで又此輿論公評の原因の何から初ったかと最一ツ穿索で見ると紙幅の廣狭や文字の大小などの外形を見上邊を覗ひて此區別が出来たもので無く全く目的を異にする處から大新聞と云ひ小新聞と云ふ名前が附て來たものだらうと人傑のイザ知らず斯申す道人だけの一人で承知して居ります爾して其目的の異なる處の何様な事だと云へば大新聞の政治上に關する事項を掲載して大人君子の參照も供へ小新聞の社會に關する事項を登録して裏店の熊八連を初め婦女子をして惡を避け善を就しむると云ふ事の道人

が今更驚口を尖らかして饒舌らずとも彼の社説の屁痴固い理屈と傍訓のやさしい文句とを比較て見ても一目瞭然盲目を除くの外誰よりも知れて居るで坐いませう(ヒヤ〜)併しあがら右の大新聞と云ひ小新聞と云ふのも前申した通り敢て法律から定まつた者で無ければ縦ひ其目的が違ひ紙幅も大小の別のある致せ新聞紙の矢張り新聞紙で社會に對しての機能が同じ事では坐いますから兩方とも肩を並べても差支への無い筈だの何故か大新聞と小新聞との人間で云ふと丁度血縁が離れて居ると云ふやうな有様で大新聞の論説を小新聞で駁しても大新聞の何處を風が吹かど云ふ面では些とも相手もせず小新聞で何様な事を書いても大新聞で之を駁する事を仕いと云ふの何した譯やら道人のサツパリ合点が行ませんが併し此様な事ハマア何でも宜として置て扱て新聞紙の機能と云ふもの大層あるので我々が是まで新聞紙の爲に誘導せられて智識を開いた事と云つ

たら何の位で坐いませうか彼の情婦の飽章でハ無いけれども實に口よも筆よも盡し難き程で御座います(セヤ)己又新聞紙が我々を誘導して我々の智識を養成して呉たものとすれば新聞紙の我々に向つて大威張り威張り開化のお師匠様然と構へ込み他々でも善を勤め惡を懲す處に注意し悪い奴のミシシ小言を云つて押へつけ善者の何處までも肩を入れて公平無私即ち依怙最後のおいやうは采配を振廻すとう新聞紙の新聞紙たる務めであらうと存じます尤も其處より云ふ云ふ云ふの譯柄もあつて迎も岡目から見れば様な理屈も行ない場合のある事と道人も豫て豫察の致して居りますけれども何ぞ致せ只今の新聞紙を以て之を五六年若くは七八年以前の新聞紙と比べて見れば餘ほど進歩したと申し度が却つて退歩した權式が無くなつたと云つても宜からうかと思ひますナゼ退歩した權式が無くなつたと云ふかと云ふに只今の新聞紙の餘ほど商法肌は傾むきを生じて

來たからで御座います(ヒヤ)ト云つたら諸君の中より早呑こみでヤイ道人何を云ふ新聞紙だからと何も施しや酔狂で新聞紙を發兌する譯でハある素より商法筋で一丈でも餘計は儲け度と思へばこそ社員が一生懸命骨を折のだから商法肌は傾むくの當然の事だと仰しやるお方もあるか知れませんが夫の諸君の仰せを承まゐるまでの事なさい道人も其邊の事承知して居りますけれども併し同じ商法と云つても彼の糠袋やマツナの景物を添てお客の機嫌を取る小商人といふ自から性質が違つて居りますから假ひ商法主義は致せ開化のお師匠様のお師匠様らしく構へ込で少しの權式と云ふものが無ければ成りません然るに此節の新聞紙の類は世間の人頭を下てハイ弊社の新聞紙の何程く直下して安價く賣ますから何卒お求めを願ひますハイ弊社ともハ紙幅を廣めて其上直段を廉價致しますから何卒お最負を願ひますハイ弊社共ハ一年中一日も休まず又勉強致します

へい弊社どもい月も幾度の附録を差上りますと恰かも道中筋へ旅籠屋の客引が出迎ひよ来たやうな鹽梅で甲が月極三十錢又賣べ乙の二十八錢或いは二十五錢と暗に競争して新聞紙の安賣が初まつたの我々の貧乏書生に取てい誠は結構千万此上もあく有難い事での座いますけれども苟くも智識發達の本家開化の間屋とも稱すべき新聞紙が此の如く權式のない事なつたの餘り新聞紙の数が多過るせいか夫ども又た外又何か深い仔細があつての事か道人のやうなお先眞暗な坊主にハツハリ見當が附ません(ヒヤ〜)扱また世の中が開けるよ伴て新聞紙も改良を加へなければ成らぬの勿論の事では座いますから改良を加へるの宜しければ唯改良くと云ふばかりで道人の眼から見ると實際此處が斯と云ふ著るしき改良も見へないやうと思はれます殊も小新聞さどい以前と比べて見れば唯紙幅が廣くあつて挿繪が大きく爲て情夫と情婦とが痴々繰合たお話しが殖たと云ふま

での事の様と思はれます又た以前の小新聞と云へば大抵寄書が附物で此寄書と云ふ欄内よ随分勸善懲惡の戒めどもあり智識開發の媒介とも成るべき事が多くありましたが此節何の新聞紙を見ても此寄書と云ふものが無くあつて大新聞と同様な社説とか論説とか云つて無暗に屁痴固い理屈を並べるやうな有様も成りましたが道人の思ふよ小新聞の元々學文のあい文學の讀かい者よ讀せるもので御座いますから文字よ假名を附て讀易くしてある位で御座いますよ大新聞と同じやうな屁痴固い論説文を載て之よ假名が附てあるの何云ふ譯のものと御座いませうが一寸道人さどの素人丁簡から考へて見ると假名が無ければ讀ない位の無學者よ此の屁痴固い論文を平假名附て讀せた處が肝心な御當人よ何の事やら何した譯やら些ども了解あいで恰も英語の獨案内を讀で其譯を知らないと同じ事で御座いますから折角骨を折て心切よ假名を附ても何の益にも立ますまい

ヤ縦ひ何の益にも立たないむしろ假名と當まして讀で呉れば未だしも
 宜が權利が何だか義務が何だか譯の分らぬ我利我利の蒙者の九ツ切
 り社説を讀ませんから折角精神をこめて自慢らしく書立た社説でも
 論文でも中等以下の者よ對しての左程も機能が無いやうと思ひます
 (ヒヤ) ソコで又た子供の道中双六を見ても日本橋が振出しよあ
 つて居る處から其規則も基くと云ふ次第でも御座いますまいが總て
 當今の何事でも東京が振出しよあつて地方での東京の受賣をする
 か東京の眞似をするとか何でも東京が標準になつて居るやうな鹽梅
 敷で御座いますから此新聞紙なども東京で挿繪を大きくすれば地
 方でも挿繪を大きくする東京で社説を堅くろ敷書ハ地方でも小八ヶ
 間しき理屈を擔ぎ出す東京で端書用文のやうな一口の投書を出せば
 地方でも電信の一言信のやうな投書をコテく並べ立ると云ふ様な
 振合も御座いますから其振出しとある東京の新聞紙の少しく襷式を

擧へてト云ふと何だか言語も角が立ますけれども早く云ば彼の安價
 い事ハ安價が其代り面白くないと云ふより寧ろ高價事ハ高價が直段
 の高價だけあつて品物が宜て莫大の利益があると云ふやうな改良し
 たらば如何で御座いませうト云へ道人の如きハシメ人足が兎や角
 と生意氣な口を出した處が所謂お釋迦様又説法で御座いますけれど
 も併し負た子よ教へられて淺瀬を渡ると云ふ事も座いますから胸
 よ浮んだ丈の事を一寸お饒舌り致しました(大喝采)

○ 出物の所を嫌ふべし

諸君よ世の諺も出物腫物の處を嫌はずと云ふ事が御座います成ほ
 ど腫物と云奴の何處でも何様な處でもお構ひなく出て参ります例へ
 ば尻の近所の穢あいだらう指の股の狭くつて窮屈だらう同じ出るな
 ら廣くとした脊中だとか或ひの邪魔もない頭の素徹邊へでも
 出たら宜さうなものだらうと思ひますけれどもナニ腫物の方で

の何様も目的があつて出るのか知りませんが尻の近所が不潔からう
 が指の股が窮屈であらうが肩であらうが足であらうが何處でも彼處
 でも自分の出度ところへアクリく出て参ります(ヒヤ〜)ソコで
 塵物が何處彼處の出處を定めず出るのでイヤクテ出處が悪いの困
 しても何も防ぎやうの無いもので居ますから別豫防をする譯
 にも行はず只出た後ノ膏藥でも張て養生をするより外は仕方ない
 ませんが出物の方の是と違つて處を嫌はず出ると云ふ譯もなし又
 好んば處を嫌はず出るとした處が随分豫防の出来ぬ事無から
 うと思ひます一体此出物と云ふの何様な物を指て出物と云つたの
 か知りませんが先づ人の身体から出る物の大小便又放屁よ目
 糞鼻糞水ツ鼻かよび耳糞又涙の八ツで居坐いますすが扱て此八ツの出
 物と一々取調べて見ると大小便の勿論目糞でも鼻糞でも水ツ鼻でも
 耳糞でも涙でも皆處を嫌はず出ると云ふ事の居坐いません只何か

するど時の表裏で場所も處も嫌はず出たがるの尻の一ツで居坐
 います(ヒヤ〜)エ、ト其處で以て此尻と云ふ奴の一種の出物で古
 人の云つた通り塵物と同じやうな處を嫌はず出る物で居坐いませ
 んけれども同じ出物でも尻と云ふもの人の最も嫌ひ最も鼻を摘む
 處のもので出物塵物處を嫌はずとの云へ甚だ不体裁なもので居坐い
 ますから權助社會やお三連中の論外として苟くも中等以上の人の必
 らず慎まねばならぬ事では居坐います若も中等以上の人でありながら
 人の目の前鼻の先をも憚らず無暗にプーとかスーとか臭い音をさ
 せて平氣の平左で居りましたらば誰でも鼻を摘んで廉恥心のあい
 下等人種だと云ふでは居坐いませう故に放屁の出さうな時よは踵を以
 て壓て居るとか尻の穴を閉めて居るとか十分な氣を附無ければ成り
 ません決して婦人方の猶更の事で縦い小野の小町や揚貴妃のやうな
 頗る附の別嬪でも出物塵物の處を嫌はずと云つて出放題プーと

臭い音をさせましたならば如何に深草の少將が小野の小町又鼻の下を長くして居ても愛想が附るでございませう如何に唐の玄宗が揚貴妃又目尻を下て居ても嫌もあるでございませう日本でも昔しから女の爲に現を抜き氣を奪われた者の帯屋の長右衛門を初めとして久松吉三才三勘平伊左衛門忠兵衛權八主水時次郎貢など澤山はございませうけれども長右衛門の放屁を知らず久松のお染の放屁を知らず吉三のお七の放屁を知らず才三のお駒の放屁を知らず勘平のお輕の放屁を知らず伊左衛門の夕霧の放屁を知らず忠兵衛の梅川の放屁を知らず權八の小紫の放屁を知らず主水のお安の放屁を知らず時次郎の浦里の放屁を知らず貢のお紺の放屁を知らずいから目尻を下げ涎を垂して後世の今まで浮名を流したのでございませう(ヒヤ)併し放屁と云ふものも人間の尻からは是非出るべき者でございませうから強ち出しての悪いと云ふ譯でございませうが其處が慎みと云ふもの

で放屁をする時よの雪隠だとか又人の居らぬ處でブースーと遣やうよ仕ないど飛でも無い恥を掻て大勢の人中で顔を赤くする様な事が座います故に腫物の所を嫌はず又出るの仕方があいが出物の所を嫌は無ければ成りませんと云った處で餘り面白くもない演説でございませうが先づ此邊で尻を閉めませう……諸君尻や〜と恐下さい(大喝采)

○君子よ似た君子

諸君よ諸君の彼の馬糞よ似た束髪ランブよ似た親父の天窓鴉よ似た鴉轉び藝者よ似た娘の風俗奥探よ似た權妻猫よ似た下手畫書の虎ヒールよ似た馬の小便鹽よ似た雪墨よ似た鳥賊の翠玉ズボンよ似た股引純金よ似たアルミ千兩箱よ似た石炭箱よ似た定めし承知でございませうけれども君子よ似た君子と云ふ君子の存じが座いますまいから一寸お話しを致しませう(謹聽)扱て君子よ似た君子と

何様ものかと云ふ其面附の尊大振て近くべからざるの周公が毛
 唐人の先祖を祭るの木像の如く容態の鹿爪らしくして狎るべからざ
 るの孔子様が仁義の講釋をする寫眞の如く賢明を眞似て安賣せんと
 するの太公望が眞直な針を以て釣をするが如く俊傑を氣取て凡人は
 交際をせざるの陶淵明が菊畑に居睡りをするが如く而して其無慾然
 たるは顔回が濁酒を飲で裏店に住が如く又其廉潔乎たるの子路が破
 れ衣服を着て恥敷思はあいやうでは座いますッコで總ての調子合が
 此様な塩梅では坐いますから楊貴妃のやうな別嬪が其袖に絶り付て
 ニコ／＼睡ひ掛ても振向も仕ないであらう白拍子のやうな美人が其
 膝に傍掛つて口説ても屁も放かけ無いであらう金銀紙幣の山を見て
 もビクとも仕ないであらう總理大臣の位に就やうと云つても嬉しが
 ら無いであらうと見受られますけれども何して／＼決して爾でのほ
 坐いません(セヤ／＼)其君子のやうに見へるの只上ッ面ばかりの

事で其上ッ面の皆あ嘘の皮を以て包んで居るので坐いますから一
 寸の嘘の皮をヒン刺て見た日よ夫の／＼ワウモ蛙を赤肌よヒン
 刺だよりも最そつと座の醒た譯で其強慾の深い事と云つたら熊鷹
 も爪を縮めて飛逃げ其心の穢い事と云つたら乞兒も腕を放り投て嘘
 出し又た其行ひの勞兒と泥坊とを合併したる如く其腸の豺狼と大蛇
 とを一所よしたるが如く其君子振て道徳修むべしと説の舌の常は妖
 猫と地獄小路の曖昧茶屋に嘗合た舌では坐います其廉耻が地に墮た
 と嘆くの口の常は博徒仲間と狡猾横町の内所部屋に利を争ふの口で
 は坐います(ヒヤ／＼)又た前よの小利を辭して後よの大利を網し
 上邊よの慈悲心を見せて其實の赤ン坊の腕でも捻り又た色を好む事
 よ於て猫の尻でも舐り狐の尻尾でも嘗め又た義理を飲事を屁とも
 思ぬ人情よ背く事を絲瓜とも思ひざるなど其内心と上ッ面の違ッ
 て居るの恰かもお月様と露と雪と墨と鷲と鴉と蛇とボンブと糞袋

と智恵袋と閻魔王と石地藏とほどの大違ひで左ながら石川五右衛門
 は堯舞の装束を着た如くで開闢以來未だ曾て見ざる所の大化物で浮
 坐います(ヒヤ〜)ソコで其化物君子が云ふ事を此方で馬鹿の真似を
 して聞て居れば即ち曰く噫世の中の無茶苦茶となりしは實に甚だし
 きことである赤子が井戸に轉げ込を見ても之を救ふ事を知らず貧乏人
 が飢へ死のを見ても之を助ける事と知らず道徳の地を拂ひ廉恥の隠
 居し唯慾張を務めとし狡猾を事とし人情の輕薄の吉野紙の如く世態
 の顛敗の鹽辛の腐れたるが如し嘆ぜざらんと欲するも得んや悉くま
 ざらんと欲するも得んや自己の外國の貧乏人でも見るゝ忍びずして
 之を救ひ他人の權妻が怪病を遺ふのでも見るゝ堪ずして之を助けて
 遣位であるから況て我が同胞兄弟に於て目も餘る事があれば何事を
 差置ても一肌腕で之を救ふて遣のが自己の性質である故に今の人は
 して若しも自己の徳行の百分一を真似れば人道も少しの頭を持上べ

けれども何ぞ致せ今の人間の皆猿も劣る人間ばかりであるから何
 百遍となく道徳を説いて聽しても馬の耳に風蛙の面も水で些とも感じ
 ないとの誠は嘆かばしい事ぢや杯と出放題を云つて君子の假辭を遣
 ふの概ね此の如くでは坐いますけれどもイクラ口の頭で喋々喃々と
 饒舌つて誤魔化子でも腹の中の穢いのを隠す事出来ません早いお
 話しが牛の糞の麝香も似て居ると云つても糞の何處までも糞では坐
 いますから何様な茶人でも鼻を摘みまず決して之を嘗る者の汚座い
 ません(ヒヤ〜)然るゝ世の中は廣し人間の頭數も多し人間の頭數が
 多ければ随つて馬鹿も澤山と御座いますから其馬鹿の中は何かす
 ると此君子も似た君子も誤魔化される者もあり甚だ敷く至つて昔
 しの君子などの此偽君子の爲に國家を無茶苦茶にした者も御座いま
 す故に古語にも大奸の大忠も似たりと云ふ事がある位で御座います
 が道人の之を焼直して偽君子の君子も似たりと云はふと思ひます其

君子よ似て居る者の馬鹿を釣る事が餘ほど上手な者で座いますから常々此偽君子よ誤魔化されぬいやうな氣を附ねば成りませんと云つたら諸君の中より或ひの首を傾いでハテ君子と君子よ似て居るの何處の何様な處で區別を附るか知らんと思はれる方もありませうが夫の誠よ辨別し易い事で縦ひ其容態が君子よ似て居たからとてペラ／＼と口から出任せよ饒舌る者の皆本當の君子での御座いませぬナゼなれば本當の君子と云ふもの言よ訥よして行ひよ敏ありと云つて決して落語家の前座のやうなペラ／＼饒舌る者での御座いませぬから其ペラ／＼出放題を饒舌ると沈着て居ても行ひよの扱目のないのとを比較て考へて見れば偽と本物との直よ知れる事で御座います世の諺も黙止猫の能く鼠を捕り能ある鷹の爪を隠すと云ふのも矢張り此事で御座います故に諸君よ於ても已よ此の偽と本物の差別が附ましたから彼君子よ似た君子よ誤茶魔化され無

いやうな用心を成さるゝが肝要で御座います(大喝采)

○正直の説

諸君よ諸君達でも此骨皮道人でも凡う人間の面の皮を被つて此の娑婆世界へオギヤアと飛出して来た者の皆正直者のが生れつきで御座います故に少しでも悪い事をするか又ハ嘘を突て人を欺すかすると誰も何とも思ひないでも自分の腹の中よの恥度氣味悪く思ひます世の諺も人を叩いて夜が寐れぬと云ふ事が御座います成ほど夫よ違ひない人に張倒された奴の只悔しい忌々敷と思ふだけの事で寐酒の一杯も飲で我慢して寐れば随分高野で寐られますけれども人を張倒した方の酒を飲ふが團子を食ふがドウも心配で寐附れぬ者ちや再で御座います是が即ち持て生れた良心と云ふものが咎めるので人の知らぬと思つても悪い事をしたの自分の腹の中で自分が知つて居るからで御座います(ヒヤ／＼)故に何事も限らず自分の腹の

中で氣味悪く思ッて受付かいことい決して云ッたり仕たり仕かい方が宜しいので御座います人間と云ふものい膝ッ小僧でノマクサと這摺廻る子供の時から腰をくの字にして杖を便りよ歩行く爺さん婆さんよ成まで常よ心掛べき事い只この悪いと思ふ事を云ひないのど仕あいどの外い御座いません然れども只口の先で悪い事いする者でい悪い事を云ッてならぬと云ッたばかりでナセ悪い事を仕てい行あいかナセ悪い事を云ッてい行ないかと云ふ譯柄を得心しなれば物の運びが附かい處からソコで學問と云ふものがあるのでは坐います然だから學問をした者い心を正直よ持て悪い事を仕あいやうよ悪い事を云はあい様よするが當然の事で坐います(ヒヤ〜)然るよ今の學者を見るのよ決して爾でのい坐いませんリーダーの二三ペーッも讀か翻譯書の四五枚も讀とズット吞込顔でオイ君い法律よ正條なき者のい其罪を論ぜずサ人よい天賦の自遊と云ふ者がある親父の財

布へ手を突込でペラ札を引張出せば取も直さず窃盜犯だけれども母親を胡麻化子て臍線金を絞り出すのい決して詐欺取財の罪よあらす何だいはから自遊の温習と出掛やうかとか或いハ新聞の社説が何か斯が噛碎けるとか或いハ受賣演説の一席も饒舌れる様よあるとズット獅子ッ鼻を勃起して今度の新内閣を組織するよ就て總理大臣の縁ハテツキリ僕よ來だらうと思ッて居たのよ又々舊内閣の人を用ゆるどの實よ嘆かはいしい譯だ彼の韓退之が千里の馬い常よあれども伯樂の常よあしと愚痴を溢したのよ尤も千万譯だ今の政府い人材登用の道を開く事を知らあいから困るなど、途方途徹もない大法螺を吹てペチャクチャ饒舌るばかりだから縦ひ法律學よ達したにしろ政治學を卒業したよしろ學問をした効能と云ふものい些ともい坐いません(ヒヤ〜)或人の云ッた話しに書物を讀だ者い只空ッ口を饒舌るばかりで何の屁の益よも立あいが書物を讀あい者い却て善事を仕たり

善事をするに云ひましたが如何様其邊の順珍閑があるかも知れませ
 ん三才因縁辨疑と云ふ書も云つてありますのに學文の奥儀と云ふの
 心正直よして曲らず已れを高ぶらず人を侮ざらず柔和よして人と争
 りず貧乏人を憐みて金持の人よ諂はず高慢ならず片意地ならず老た
 るを敬ひ幼稚なるを慈しみ已れを謙避りて人を貴み怒を押へて物よ
 堪忍つよく誠ありて偽らざるを道を行ふの至極とす人の學徳學才と
 云ふの心を丸くして角あらず物よ交りぬる水の流れよ隨ふが如くな
 るを徳と云ふ然るよ世間の學者を見るよ博學よして廣く事を知りな
 がら或ひの親へ不孝又の君へ不忠人と交りぬるよ偽り多く高慢よして
 他人を侮どり心よ角ありて仮初の事よも人と争ひ徳深くして富貴の
 人よ諂らひ家業を怠惰て身おさまらず斯様の類ひ世間よ多し是等の
 人の譬ひ千萬卷の書物を暗するも大學一卷讀ざるよ劣れりと又た四
 書國字辨學而第一の編の講釋書よ云つてあるのを讀で見ると學問を

して天下の道理を知り物事を務めを能くせんと思ふべし學問の素よ
 り名聞利潤の爲よするにあらざ博文章を上手よするを詞章の學と云
 ひ書籍を多く覽へたるを本箱學者(トッコイ是の道人のお負だが)記稱
 の學と云ふ此二ツを重よして脩身正意治國平天下の志しの無きを俗
 儒と云ふ博學詩文も儒者の兼る所なれども眼の附け處が違ふ云々ど
 あり又た孔子の云ひれましたのよ人の生り直かり罔て生るの幸ひよ
 して免かると云ふ事が座いますは是を一寸講釋して見ると天道様
 の正直よものだから人間も矢張り正直よするのを好み給ふ故よ人間
 の正直よさへして居れば無事よ暮して行るものぢや然るよ不正直よ
 して道よ背きたる者が無事に世渡りをして行と云ふの無理よ生て居
 るのだと云ふ事では座います又た中將姫行狀記よ神明佛陀の正直柔
 和赤者を恵み給ふ何ぞ慳貪邪曲の非禮を祈るも納受し給はんやと云
 ふ事と傍坐いますすが扱て右の色々な事お依て見れば正直よするの

人間第一の務めは相違座いませぬ道人かどの常は正直を守って居て十錢の銀貨の移規則通り十錢は遣ひ一升の米は升目通り一升は焚て食て居りますから貪乏のして居ても命の別條なく暮して居ります故に諸君も正直の頭は神宿ると云ふ事を土臺として能くお働らき成さいませ併し同じ正直でも馬鹿正直の此限はあらずでス(大喝采)

○相場の説

諸君よ世の中の物事と云ふもの何でも相場と云ふもの、あるもので假へば紙屑の壹貫目十六錢だとか或ひは薩摩芋の壹貫目が六錢だとか或ひは白米の一圓は何升だとか或ひは酒は一升が何程だとか或ひは薪は一把がいくら味噌の百目がいくら團子の一串がいくら大福餅の一ツがいくらと凡う何様な物でも相場と云ふものがは座いますけれども此相場と云ふもの時として馬鹿くしく高くあつたり又時としてマラボウと安くあつたりして常は極つた事がないから

宜しいので御座います(謹聴)ナゼなれば相場が極らさいから思ひ掛さい金を儲けたり又た越中積鼻樫のやうな向ふから外れて飛でもさい損をしたりする處から世の中の車が廻って行ので座います若も夫が來年の米の相場は降ても照ても十圓から十五圓十五圓から十五圓と極つて居た日よ縦ひ活馬の眼玉をホチくらうと云ふ米商でも儲け口の御座いますまい然るを來年の事を云へば鬼が笑ふ來年の事分らるいので味あるので御座います又遣出し官員の相場は八圓以上十五圓までと極つて居たならば國家の爲に二ツとない命を棄るやうな奮發心を出す者の座いますまい又た學者の相場も小學校の教員と極つて居た日よ肺病を引出すまで勉強する者の御座いますまい又た冥土の相場は極らさいから地獄極樂も出鱈目も本當に開へ又た理屈の相場が極らさいから出放題の法螺も眞言らしく聞へ又た藝妓の相場も一圓で直に轉ぶと極つて居た日よ媚妓買をするのも

同じ事あれば誰もセツくと通ッて鼻毛を敷る、まで又踏り込み者
 へありますまい又た娼妓の相場も薄情が請合と極つて居た日よりの十
 錢轉りの私窩子を買方が安わがりて宜から如何よ田舎大盡だからと
 て髻の毛を抜る、まで又惚けも致しますまい(ヒヤ〜)物の相場と云
 ふもの、皆この通り高かつたり安かつたりして極りが無いからこり
 勉強もすれば堪忍もするので御座います人間の一生涯しても五十年
 が相場と極つて居て五十年目よ誰でも地獄極楽へ寄留替をする者
 であつた日よ汗水を流して齧齧と稼ぐ者の相場いません縦ひ七十
 八十の年寄よなつても朝顔の種を蒔の復た來年の花を樂しもうと
 云ふ慾があるからで御座います又た恐れ多き引証ながら若し政府の
 お役人様ハ薩摩と長州の人よ限る最初仲間よ加へた土州人も肥後人
 も今ハ氣よ食さい馬鹿でも利口でも薩長の人よ限ると相場を極まし
 たならハ後世人傑を出す事ハ出來ますまいデスから物の相場と云ふ

もの無くて成らぬもので御座います其相場よ極りのさい
 處に直打があるので御座います(大喝采)

○新刀論

我大日本國の諸君も御承知の通り開闢以來刀を以て天地に鳴り草薙
 の寶刀を以て八頭の大蛇を斬りしより武門權を失ひ帶刀を廢せられ
 同一の人民よ成下るよ至るまで未だ曾て日本刀の評判を落した事ハ
 御座いません其日本刀の評判の宜きよの實よ大變なもので之を講
 釋師流儀よ屁痴六ヶ敷云ツて見れば氣風凛然鬼神も恐れ之を匣の中
 へ藏めて置ば龍嘯ぶひて雲を呼び之を床の上よ置ば虎吼て風を喚ぶ
 若し夫れヒラリと鞘を脱バ電光一閃霜華四散人をして覺ずブル〜
 が〜たらしむ日本刀の利鈍の豈よ正宗村政新鬼斬の銘刀を待
 て而る後よ知らんやと云ツても宜位で御座います(ヒヤ〜)故よ古戦記
 よも眞田幸村の三丈の大刀を揮り廻して百人の首ばサリサリと切落

したとあり又た薩摩の武士の人觸れば人を斬り馬觸れば馬を斬ると
 威張て居りましたたデスから其頃の頭ふ糞船束縛を載ひて袴高袴を穿
 き天下を睨み潰すやうな勢ひのある者で無ければ日本刀を恐れな
 者のありません若し我々共の平民が誤つて其頭か尻に障つた時よ
 クヤ〜其方の武士に對して無禮を致した手討まするから左様心得
 ろテしんで大根でも切るやうなチヨキンと首を刎られるので斬た者
 のエヘンと吹拂ひをして威張て居りますけれども斬られた奴こそ宜
 面の皮丸で犬死同様の斬れ損で御座いますから瘡疾のやうなブル〜
 ガマ〜震へて膽玉を潰し墨玉を縮めるの誠な臆病なやうだけれ
 ども日本刀に觸て恐れな者先づ馬鹿か阿房か命知らずか狂氣で
 御座います(ヒヤ〜)ケレども如何よ日本刀が銘刀で撥張奴子が威張
 て居ても時節よハ勝かいいもので物變り星移り維新後の撥張奴子も右
 の日本刀を刺事を廢せられて我々の平民よハ民劍と云ふ物を帶る事

を許されましたから今度のアベコベも此方で威張やうなりました
 スルと又た之よ伴て舊守刀だの因循刀だの頑固刀だの姑息刀だのと
 色々ある生倉刀が出て来て開化刀の錬磨を妨害する處から開化刀も弱
 り切て居ると今度の急進刀と云ふ奴が出て参りました此の急進刀と
 云ふ刀の餘ほど鐵へが宜から彼の舊守刀や因循刀あどの皆も恐れ入
 て仕舞ましたから其頃血氣盛んを壯士達の無暗滅法界に此刀を揮廻
 して居た處彼標あよ先眞暗も急進刀を揮廻しての實も劍呑たと云
 ふ者もあつて其急進刀を制する目的で又た漸進刀と云ふ奴が出て來
 ました(ヒヤ〜)此の漸進刀と云ふ奴が出て來て急進刀の先眞暗を
 防くやうよハ見へましたけれども漸進刀も亦た弊害を生じて虚飾
 刀だか天獸羅刀とか云ふ名目が附ましたナセ天獸羅刀だの虚飾刀だ
 と名目が附たかと云ふよ其鞘ハペンキを以て塗り其柄ハ鍍金を以て
 飾つて一寸田舎親父を威し附る事ハ出來ても肝心な中身の生倉刀だ

からで御座いますスルと今度の過激刃と云ふ奴が飛出して来て虚飾
 刀を制しやうとするも又た専制刀が出て虚飾刀を助けるやら其中
 又た立憲刀を民権刀店に製して頻りに鍛へ出し専制刀を廢しやうと
 致しました(ヒヤク)此の立憲刀の近來の銘刀で邪を防ぎ奸を制する
 の劔力があるけれども是を製するのが中々六ヶ敷さうで御座います
 ナゼ六ヶ敷かと云ふは此刀の民権刀中の上作即ち正義刀を銘して之
 は奮發刀の地鉄を和し正理公道の大鉄槌を以て之を鍊鍛して製し
 ければ成らぬからで御座います且つ是の政刀鍛鍊所で無ければ製
 する事が出来ません故に政刀鍛鍊所を開くを以て目下の急務と致し
 ます是れ民権刀の店に於て頻りに政刀を買込む所以でが御座います
 う(ヒヤク)抑々政刀の色々の銘刀を鍊合せて製する者で即ち勤王
 刀愛國刀國會刀自由刀政進刀大刀團結あどの皆りの分子で居坐いま
 す此等の銘刀の義氣を以て鎚と爲し忠魂を以て氷と爲し勢力を以て

地鉄と爲して之を製するので居坐いますから少しも生倉の鈍性の合
 みません然れども惜い事よの往々附焼刃があつて政刀の名を汚す事
 が多坐いますけれども政刀の元と銘刀の鍊合せより成立もので其性
 質の強くして屈せず折らず若し一たび之を揮廻せば天下に敵なく千歳
 不易の寶刀で居坐いますト何だか譯の分らぬ刀人の寐言見たやう
 な事を並べて新刀論と致しました(大喝采)

○殺生とい何ぞや

諸君よ殺生と云へば生物の命を取る事ばかりを殺生と云ふと心得て
 居る人が居坐いますが強ち物の命を取るばかりが殺生で居坐いま
 せん事と品又依不便と思つてした事が却て殺生よなる事もありま
 すから能く氣を附ねば成りません倒へば一人の孫を餘り可愛がり過
 て云ひあり放題又甘い物を食せたり果物を食せたりしてツマリ病身
 まする殺生もあるば又た子を育てるよも愛よ溺れて見たがる物を見

せ聞たがる物と聞せ着たがる物を着せ欲がる物を遣り食たがる物を食せて爾して些とも教と云ふ事をせず氣随氣儘我儘勝手放題に身を持せる人がほ坐いますすが小兒の時や親掛りの時ハ夫でも宜しいが其處が身所を持やうも成ても矢張り其我儘や氣儘が癖も成て居て遊ぶ事や手慰み事が好で肝心な家業をお留主にする様でハ行末が覺束ない家の大小も掲はらず一軒の主と云ふものハ實に大事なもので其主人たるべき者の身持が正しく無ければ忽ち身代を滅茶くもして其家相應も妻子着屬が難儀を致しますから我子を甘く育てるのも殺生の中で汚坐います(ヒヤ〜)又た鳩や雀を殺すのを見てア、殺生も事をするとシカミ面をする人も自分も思はず知らず無益の殺生をする人もあるもので即ち手代や小者を使ふも云ふべき事ハ屹度云ひ止めべき事ハ屹度止め教ゆべき事ハ屹度教へ小言を云ふべきハ屹度小言を云ふのが後の身の爲では坐いますのは是ハ人の子だと思つて云

ふべき小言を云ひ止むべき事も止す少し位の事ハ世間並だからア〜宜つと聞ぬ振や見ぬ振をして濟す人が世間ハイクラもほ坐いますすが是も無益な殺生の中で汚坐います(ヒヤ〜)又た金銭の多少も限らず大切も取扱ハ無ければ成りません某處の小店も金財布が置てありましたのを乞食がチヨイと引擽つて逃ましたスルト外の乞食が是を見附て引捕へオイ手前ハ何をすのだ全体泥坊を仕まいと思ふからこう乞食をして居るのでハ無いか盗とをするやうなら乞食を止るが宜食の中も泥坊があつてハ乞食仲間の顔垢したと云ひながら財布を取返して彼の店へ行きモン旦那さんエ自己等は素より盗みを仕まいと思ふからこう乞食をして居るので汚坐いますすが元々金が無いからの乞食ですから手近ハ處も錢があるもツイ盗む心が發ります縦ひ手を出して盗まぬいでも心も罪を造らせるだけ無益の殺生では坐いますから人の欲がりさうな物の必らず手近な處も置ぬやう

はして下さいと乞食は異見をされたと云ふ話しが坐いますか如何
 様乞食の云つた處の尤も千萬事ではな乞食ばかりでなく取よい處
 又金を置は盗人でない人を盗人とするやうな事も坐いますから誠
 は此上もあゝ殺生で坐います前も云ふ通り蚤も殺さない人でも
 覺へず知らず殺生をするとも坐いますゆゑ能く心得て居るべ
 き事では坐います殊に金錢などを手近な處へ置たが爲は悪人でもあ
 り者を悪人とする事世間に往々ある事では坐います(トヤ)元來人
 間の心と云ふもの知れないもので今日正直でも翌日の悪もある
 事もあり皆その時々によつて移り替るの人情の習ひでは坐います三
 日向顔せざれば其智量り難しとの大方この邊の事を云つたので坐
 いませう尤も悪人の中は染つて居ても其悪は染ぬ者もあり又た善人
 せ交はつて居ても悪なる者もあつて一概は云へませんけれども
 併し身分の軽い者の兎角金錢の爲は心を變じ易いもので今まで彼の

人の正直だくと云はれて居ても根が貧乏だから大金を見るとツイ
 其金も目が暗んで悪い事とい知りつゝ不心得を働く事も坐います
 から金錢の出し入の餘り人の目も留らぬやうにするのも殺生を憤む
 の一ツでは坐いますイヤ是で丸で坊さんの説教見たやうで餘り面
 白くさいから此様を小理屈のモウお止として後の演題に移りませう
 (大喝采)

○女郎は鼻毛を伸す人に釘壹本
 昔も成る凡倉親父が物知先生の處へ行て親父先生一寸伺ひ度事があ
 つて罷り出ましたか……と云ひ出すと先生のメツと天狗の鼻をヒコ
 附じて先生成ほど此處へ坐つて見れば罷り出られたと進ひあいが
 又自己は開度事があるとい何事ぢやア遠慮なく聴しやい自己
 の天の夜這星が積鼻輝を引摺て居る事から地球玉の尻玉より大きい
 事に至るまで何でも残らず心得て居るから何様な事でも臆面なく聴

ッしやれ親父「エ、外の事でも多坐いませんが私しの息子の事で先生
「ム、彼の馬鹿野郎のとか……成ほど馬鹿野郎が何したのちや親父」馬
鹿野郎……是の驚きました先生「驚いたら目でも何でも廻すが宜ワ……
然が此處で目を廻されて厄介だから夫ぢやアア利功を息子と
して置ふヨ……シテ其利功を息子が何したのちや親父」左様私しの息子
の誠な孝行もので坐います其孝行者が年久しく買馴染で居る吉
原の某女郎を自家へ連れて来て女房又仕たいと申します先生「馬鹿な奴
だ親父」處で私しの可愛い息子の事で多坐いますから息子の氣に入ら
者あら女郎でも藝者でも勝手に連れて来るが宜いとやて居りませすけれ
ど先生「馬鹿な奴だ親父」何ふ云ふものか親類の者が蕎麥屋の湯桶見た
やうな横圖ツ法から口を出して女郎あんぞを女房にする事成らな
いとやします先生「ヒヤ〜親父」ソコで私しの思ふは後にも先にも
掛替のないマツメ一人の息子で多坐いますから若もの事無分別了

簡でも出しての世間へ對して濟ないと甚だ心配で成りませんが……
先生「ソウ〜親父」此様を時よ何したら宜で多坐いませう先生「イヤ
ハヤ是の何もハヤ馬鹿な事を云ふ人ぢや前前の糞袋と智恵袋が取違
ツて脳味噌と手前味噌とを間違ひして居るのぢや前前の全体人並外
れた凡突だから彼の馬鹿野郎を孝行者と思つて居さッしやるが何が
孝行者ぢや尤もかう〜も糖味噌もあれば澤庵もあり或ひの奈良
漬もあれば味噌漬もあるけれどお前の息子はかう〜の名を附て見
ると爾サ何だらう先づ腐り澤庵の尻尾を細く刻んで覺阿よした位の
かう〜者ぢやナセ自己が爾云ふかと云ふは能くマアお前も糞袋か
ら無い智恵を絞り出して考へて見さッしやれ縦ひ馬鹿野郎も致せ馬
鹿の馬鹿だけの智恵を出してお前の氣に入るやうな事を云ふて欺す
のぢやお前を欺暗かして自分の望みを遂やうとするのぢや全体お前
の凡突ぢやから其様を事よ欺されるのも無理ないが縦ひ凡突でも

頼間でも親の何處までも親ぢや子の分才として親を欺すやうな者
 何様も杓子定木を押付ても孝行者との請取無いちや自己よ云いせれ
 ば下ッしても馬鹿野郎ぢや……ナア爾ぢやあいか……子の事を此様
 なよ悪く云ふたら如何よお前が凡突でも心持が宜もあるまいがお前
 が聞ッしやるから極打明た處を遠慮なく云ふぢや……此様お六ヶ敷
 ことを云ふてもお前のやうお明盲目より分るまいが婚姻の万世の本
 と云ふて親々の差圖を請けて媒灼人が無ければ娶らすとの古人の教
 ぢや尤も現今での自由結婚ぢやとか西洋風ぢやとか云ふて何處の馬
 の骨やら牛の骨やら分らぬ者を女房よしたり何處の穢多やら乞食
 やら知れぬ考を亭主よ持たりするのが流行ぢやが粘着のが早けり
 や離れるのも早い之を例へて見れば湯沸しで湯を沸せれば沸のも早
 いが醒るのも早いやうなものぢやインテ女房と疊の新しのが宜と
 云ふてお朝見た女房と晩よ見る女房と其度毎に顔が違ッて居るやう

での丸で私窩子宿の鼻ッ張は行たやうぢや……然ぢやから婚姻と云
 ふもの其様な手輕くするもので無……何ぢや説諭の仕方が
 旨いぢやらう自己の學者ぢやから能く物の道理ヲものを知ッて居
 るぢや能く物の道理を知ッて居る自己が此位噛碎いて云ッて聞した
 ら凡突のお前でも能く分るぢやらう……ソコで親の氣も入らず親類
 も不心得な者を親の苦勞又ならうが親類も見放されやうが構ひない
 ナッ丁箇の者が孝行と云いれやう等があい是が若し孝行者なら親殺
 しの後褒美を頂戴するぢや此世中其様お頼珍閑の事があるかいお負
 自分のお思ふ通り又成らない時の親も親類も棄て自分の命も棒よ振
 て仕舞と云ふやうな其様な馬鹿者が何して家の相續が出来るものか
 い如何に子が不便ぢやとて親の身として之を異見する事も知らず人
 は笑はれる事も構ひないと云ふの子を不便ぢやと云はッしやれど是
 を曲愛と云ふて可愛がるのぢや無い憎むのぢや本當よお前親馬鹿

チャリン醬麥屋の風鈴ぢや併しお前に限らず世間を見渡すまたまく
 學文などを好み自家よつかり居つて柔和くして居る息子がある
 と若い者が彼様お魂氣を詰めての毒ぢや若し病氣でも出ると困ると
 云ふて親が手と廻して女郎買を教るもあれバ又た遊藝を習はすとて
 種々の道具を買ふて遣たりして榮耀者よ仕立て已れと備へる業を忘
 れるやうに教る親鹿馬チャリンもあるが素より生れながら赤ん坊
 の中から贅澤で我儘お奴のない皆親々が心得違ひで飛でも無い道樂
 者よするのの賢え間違つた頓珍閑の事さや……先づ物の道理を云ふ
 て見れば此様な者ぢやからお前も子を可愛がり過て望みの通りよし
 て遣度と思ふ曲愛の心を止て其間違つた頓珍閑を改ため是までの事
 の仕方もないが此後の必らず頓珍閑よ行ないやうに能く氣を附さつ
 しゃい親父成るサウ聞て見ると私の息子の馬鹿又た私モ親馬鹿チャ
 リンのやうだが何よ致せ私が其様お理屈を云つたからとて彼奴的

の人を馬鹿よして居るから父親さんお前の氣でも違つたのか何處の
 腥坊主よ其様お説法を聞て來んだアウも親父さんの頑固で固る
 ナト新聞でも煎じて飲で開化よ成り給へ何ぞと頭から愚弄よ知れ
 切た事で御座いますから何か先生から其話しをして下さる譯よい
 りますまいか先生夫れ見さつしやい子の身として親と愚弄あど、い
 不屈け千万失敬至極の奴ぢやあいか併し夫もお前の教育方が悪い
 ら其様お安本丹よ成たのぢや……宜しい馬鹿野郎を寄越さつしやい
 自己が膏を取て遣から親父夫れぢやア何かお頼み申します只今息子
 を寄越ますからト云つて親父が歸ると間もなく例の馬鹿息子が遣て
 來ました……扱是から何様お話しよ成りますか一寸一服遣てから申
 し述べせう(ヒヤ〜〜〜)
 扱是からが女郎買よ就てのお話しでは座いますか彼の親父が歸ると
 間もなく馬鹿息子が遣て來ました(謹聽〜)息子「エ、只今親父の云ふ

よ何だか先生が用があるから行って開て来いと云ふから参りまじ
 たが何の用で座いますか先生「別用の用でも無いが今お前の親
 父が云ふよ前よ馴染の素屁多女郎が粘着て居て夫をお前が自家
 へ入て女房も仕やうと云ふのを親類の者が苦情を云ふとやらで親父
 が自己の處へ相談も来たのぢやが全体りの素屁多女郎と云ふの何
 時の頃から粘着たので其素屁多女郎よ何様な義理があるのぢや息子
 「素屁多女郎との殿しい彼婦と僕との間柄と云ふもの天よ在ての比
 翼の鳥地よ在ての連理の枝權八小紫でも浦里時次郎でも僕と彼婦と
 の情交を見たら定めし跳足で逃出すだらうと思ふ位を親密な中で即
 ち異身同体との此事でせう然るが故も彼婦が身よ係るの褒貶毀譽の
 取も直さず僕の身を褒貶毀譽するも同じ事なれば若し彼婦を讒謗す
 る者あれば僕の一身の務めとして飽まで辨駁しおければ成り
 ません夫れ然らば即ち今僕が先生に向つて一撃を試みるも敢て

無用の辨での無からうと思ひます果して然らば先生の何故も彼婦を
 目して素屁多女郎と慢も彼婦が名譽を毀損せられますか僕が先
 生の質問も答ふる前よ先づ其事からして承りたい先生「何だ屁暮演
 説者が然もでも浮されたやうな夫れ然り然るが故も彼婦が身よ係る
 の褒貶毀譽の即ち僕の身を褒貶毀譽するも無いもんだ馬鹿野郎め
 息子「是れ又た怪からん今度の僕の事を直接よ馬鹿野郎との殿しい是
 も亦た僕の名譽を毀損するものなれば其浮説を伺ひませう 先生「自
 己が素屁多女郎ぢや馬鹿野郎ぢやと云ふた譯が聞たければ自己がお
 前よ尋ねた事を返答して見さつしやい爾すれば自然よ素屁多女郎も
 馬鹿野郎も皆分つて来るぢや 息子「イヤ先生の僕の齒牙よ懸るよ足
 りい人だ此の如き人と語を交ゆるの僕の尤も快しとせざる所だけれ
 ども先生の老耄よめんじて一歩を譲り彼婦をして僕の妻たらしむの
 所以を一寸簡短よ陳述致しませう……先生謹聴く」と云ひ給へ

抑く娼妓と云ふ者の實は賤業の徒である一概之を云へば破廉恥の極と稱すべきあれども娼妓と云へば必ずしも薄情必ずしも虚笑を粧ふ者と斷言する事出来ません若し娼妓の必ずしも薄情なり虚笑を粧ふ者とするれば比翼塚の出来やう等もあし又た仙臺さんの高尾を殺しやせんで居坐いませう……先生ヒヤくと云ひ給へ……コテ僕と彼婦との情交の如何ある點に巡り居るかと思ひれば僕が初めて彼婦と交り結びし今を去る事七ヶ年前即ち僕が二十歳の時で居坐います而して其二十歳の時から今日只今に至るまで七ヶ年の永きも左ながら一日の如く共々俱々其誓ひを破りし事なく又た其親密ある事に至つて一切の刺身も半切ツ、之を食ひ一杯の酒も半杯ツ、之を飲む位の問柄なれば彼婦の僕に對して僕を保護するの義務あり僕に彼婦に對して彼婦を保護して遺の義務があります故に今更其誓ひを破り義務を缺で他の婦人を女房とする事僕に於て到底出

來ざるのみならず好んば枉て他の婦人を女房とするよもせよ七ヶ年間の馴染を重ねたる者と今日初めて相見る者との素より同日の比であらざれば家の爲め且親を大切とするにしても深く馴染のある者の方が十分利益を興へて呉るだらうと思ひますから僕に是非とも深く馴染のある彼婦を女房と致さうと思ふので居坐います先生なるほどお前の云ふ處の一通り聞へた如何様永々の馴染ゆゑ義理も重なつて居るから自家へ入れて女房と仕たいと思ふに至極尤ものやうぢや尤ものやうぢやけれども能くマア物も積つて見さつしやれ廿七年の養育は預つた親への馴染と七ヶ年の間馴染だ馴染と何方の馴染が深いかお前の親の恩と云ふものを知らぬから其様を間違つた熱を吹のぢや早い話しが今お前が其様を生意氣な事を饒舌つたり又た其様かよ生長したの誰のお蔭でさう成たのぢや又た廿七年の間の物入の何の位であらうが又その女のお前が勝手な馴染だ女ぢやから

金錢を費して此方から馴染しやつた事あれば天地を以てかへても足
 さい程の親の恩と引比べて見さつしやれ又永く馴染た者ぢやから親
 も大切にしておくと呉ると云はつしやれども是も大變な問違ひぢや成ほどお
 前の永々の馴染ぢやらうけれども親父の身を取つて馴染でも何でも
 無いぢやあいかあ負ふ親類へ對しても云ひ譯が無いと云つて心配し
 て居る親父なれば其女が飛込で来たからとて氣に入らう筈が無いぢ
 やシテ見ればお前の了簡を立るばかりで親も苦勞をかけ親類の中が
 悪くあるのぢやから夫での實も困るぢや無いか……オイ何ぢやロヤ
 く……と云はんカイ……如何も物を知らない大馬鹿野郎の安本丹ぢや
 からとて餘りと云へば餘まりの大鹿馬安本丹ぢやあいかヤヤから其
 様お横道へ迷ひ込で素尻多女郎と涎を垂して居るよりの早く心を改
 めて本當の孝行者よ成らつしやれ親も苦勞をかけ親の肉を食ふ者
 の鬼子ぢやと昔の人も云つて置たぢや夫も就て又た古人の歌も子を

思ひあんじて瘦る親の肉を喰ふが人が鬼子ありけり」と云ふ事がある
 が是の自分の望む心を堪忍して親も從へよと戒めた事で即ちお前の
 身も壁へて云つて見やうから自分の引摺込み度女を入らず親の云ふ
 通りも從へよと云ふ事ぢや親も苦勞をかけ親も心配させる親を食
 ふも同じ事で其苦勞や心配の爲ふ親が瘦れば親の肉を食ふ鬼子ぢや
 と云ふ事ぢや……オイ何ぢや些たア譯が分つたカイ譯が分つたらヒ
 ヤ……と云はつしやれとド……打込れて流石の生意氣息子も初め
 の景氣は何處へやら吹飛で仕舞て閉口したと云ふ話しが座坐います
 が成程さう聞て見れば夫も違ひない古人の俳句も「手も取る矢張り
 野も置け蓮華草」と云ふ名吟もあり又た「蛇食ふと聞けば恐ろし糞子の
 聲」と云ふ戒めもあり又た「若き身の殊も慎め皆人の踏迷ふの戀の山
 道」又た「我の唯實は戀じやと思ひしは惜や金持て來いであつたか」と云
 ふ歌も伊坐いますから是等の戒めも依ても廢娼論の盛んも行はれる

のも賊も尤も千萬の事でイヤ女郎も娼法の中だから敢て廢しるも
當らぬいがソコハ買ふ人の方よ於て鼻の下を締め唇の毛を抜れぬ
やうよ用心なざるが宜しい……ハテ此様を事を長たらしく饒舌ッて
居た處が餘り面白くもぬいからモウ此邊で尻を閉めませう若しは意
よ入たぬ方がぬれバヒヤヒヤと愚弄て頂戴へイお八釜しう(大噓采)

○子供の喜悪

道人の前條よ人の善惡と女の善惡とを申しましたが今度の子供の善
惡を云ッてお聞え達しますから子を持って入ッしやる親達並びよ子供
衆よ於ても若し是を尤もだと思し召あらば成べく惡の方を避て善の
方を移られるやうよ注意を願ひます(謹聽く)扱前の例よよつて善
き子供衆の方から云ッて見ますれば先づ第一が學問の好き子供次の
親の給仕をする子供次の親の異見を能く聞分る子供次の物の道理の
能く分る子供次の寐起よ親へ挨拶をする子供次の堪忍の強ひ子供次

に分らぬ事の間ひ返す子供次の物事を手張へ扣へる子供次の三度の
食事の外餘計な物を食たがらぬ子供次の親の前で本を淡習子その次
の兄弟中のよい子供次の物事を忘れぬ子供次の朝早く起る子供次の
作文の能く出来る子供次の使よ行て言葉のハッキリ分る子供次の危
険どころへ立寄ぬ子供次の師匠や長上の人を尊ぶ子供次の生意氣さ
事を饒舌らぬ子供次の友達と中の宜い子供次の人と争ひ喧嘩口論を
せぬ子供次の目下の子を大事にする子供次の店番を能くする子供次
の算筆の達者な子供次の自分の物を大切よする子供次の使ひの早い
子供次のドンタラでも能く勉強する子供次の運動に注意をする子供其
次の先生や親の教よ背かぬ子供次の出遣入よ禮儀の正しき子供次の
遠あるきをせぬ子供次の拭き掃事をよくする子供次の小遣ひ錢を遣
はぬ子供次の親より先へ歩行ぬ子供次の着物を汚さない子供次のあ
となく遊ぶ子ト夫から今度の悪い質の小供を云ッて見ませうあら

先づ第一が親の云ふ事を聞き子其次が學校へ行のを嫌がる子其
 次の錢遣ひの荒い子其次の學校へ行歸り喧嘩をする子其次の強情
 で手は齒もオへあ子其次の悪いたづらをする子其次の年の行
 い者をイザメル子其次の犬をけしかける子其次の本の繪墨を塗る
 子其次の人を目掛けて無暗に石を抛る子其次の他所の板塀へ落書をす
 る子其次の日曜日を楽しみよして待つ子其次の自分の名前も書ない
 子其次の辨當の茶好みをする子其次の虚言を突て人を欺す子其次の
 木や竹の折を持ある子其次の人力車の後押をして駆け歩く子其次
 の怪病を遺つて學校を休む子其次の食事の時よベチヤリチヤ饒舌く
 る子其次の大人の尻馬に乗てさし出口をする子其次の草木を慰みよ
 折る子其次の無益な生物を殺して喜ぶ子其次の着物を汚したり破つ
 たりする子其次の傘を破る子其次の友達の中あしき子其次の早覺へ
 して直も忘れる子其次の着物の袖で鼻汁を横かでする子其次の物を

貰つて禮を云ない子其次の人を唾を吐かける子其次の橋の欄干を
 渡る子其次の何處でも構はず小便を垂る子其次の大人を馬鹿にする
 子其次の刀物を持って遊ぶ子其次の悪垂口を叩く子其次の何歳までも
 鼻を垂る子其次の胡坐を組て飯を食ふ子其次の火を持って悪戯をする
 子ト是れ先づお仕舞で坐い(ヒヤ〜大喝采)

○小僧さん能く聞ッしやい

小僧さんよ能く聞ッしやい昔しの人が詠た歌よ人多き人の中にも人
 どあき人となれ人々どあせ人」と云ふ事があります是を一口は講釋し
 て見ると例へば日本の中よの随分澤山な人間が居るけれども其澤山
 な人間の中で人間らしい人間と云ふ者の少ない所謂盲目千人に目明
 一人だから奉公をして居る者の能く辛抱して人間らしい人間よあれ
 又た主人たる者も能く氣を附て人間らしい人間よして遣よと云ふ意
 味で御座います(ヒヤ〜)又た鶏口とあるとも牛後とある勿れと云ふ

事もありませすが是れ牛の尻尾よある位あら未しも鶏の嘴しよあつた
 方が宜と云ふ事で早く云へば大店の番頭よなつてへいく頭を下て
 居るより小店でも宜から自分が主人よなれど云ふ事で多坐います
 が成ほど夫よ違ひない人よ使はれて居るより自分が働いて自分の
 飯を食て居れば其方がインラ宜か知れあいの違ひ無いけれども其
 小店の主人よあるよしても何せ握り翠玉をして遊んで居て成れる者
 でない是非とも商賣を覺へると云ふものか乃至又た職業を覺へる
 と云ふ者か何か知ら一ツの藝と云ふものを吞込なければ成りません
 が是とても握り翠玉でノホ、ンを極て居た日よ何時まで立てても覺
 へられる者でないし是非其道を心得て居る人よ就て習は無ければ成
 らあいから其處で奉公と云つて他所の家へ丁稚小僧よ這入ので坐
 います……ねへ小僧さんさうでせう(ヒヤ〜)先づさう云ふ譯で奉公
 して親も何かして人間らしい人間よして遣度ものたと思ひ又た其主

人も何かして人間らしい人間よして遣度と思ふの人情だが扱て困
 るの肝心な誤當人が人間らしい人間よ成度ものたと云ふ處よお氣
 が附れあいのよ困つたもので坐るテ(フウ〜)イヤノウ〜で
 無いヒヤ〜だらう其証據よ唯空ツ口ばかりが達者で旦那の前で
 ン據ころあく縮身なつて居れど一寸臺所へ行どモウお三どんを相手
 よして惡垂口を叩く夫から外へ使ひよ出せば一生懸命よ玉轉がしの
 向ふを張て居るやら又た時として誰よ頼まれたか車の後押をして
 駈すり廻つて居るやら夜に成と未だ宵の口からコソリと〜仕なく
 ても宜お辭儀の稽古をして肝心を稽古をすべき手習ひ双紙の三年前
 よチャーンと鼠が横取して居る夫から寐れば寐言を云ふ寐尻を垂る
 起せば寐惚て丸裸休で駈出すイヤハヤ埒口や無いのだから折角七ヶ
 年の年季よ禮奉公の一ヶ年を加へて都合八ヶ年日數よして二千九百
 二十日又た時間よすれば八万〇〇八十時間の永い月日を送つてイヤ

然ばとお暇を頂戴して出て来て見ると主人の家も居て米の相場を知
 らずよ食て居たやうな態より行す只大符牒ばかりを覺くて高慢痴奇
 事事を云つて居たどて誰も相手にして呉ない處から急な啞者が火事
 に逢たやうなマゴくしても何の益も立ない處から又い桂庵も手
 敷料を拂つて新規巻直まど出掛る者が世間よりイクラもありすが
 ナント氣の利ない才碌でい座いませんか(ヒヤ)故も屁を放て屁
 を閉めるやうな其様な屁間な事を仕出かさ無いやうな奉公をして居
 る中に能く身を慎み氣を附て商賈なり職業なり自分の目的だけの事
 を能く覺へて主人を離れた時の直より一軒の主人株もあるやうに勉強
 を仕あげれば成りません大あり小あり一軒の主人株とあつては覺じ
 ろ自分の勉強次第で一日の給金が一圓も成るか百圓もあるか知れあ
 がのだから一年も二度の宿下も饒の井を三杯食て腹を下すのどい事
 が違ひます夫も就てい昔しの人か戒めて置いて呉た歌がありますから

之と能く覺へて居て神妙な奉公を勤め成さいますエヘン其歌の先
 ブ斯でス

- 奉公に來た日の心いつまでも忘れず念を入れてつとめよ
- 主人の仰せがあらひ早速返事よくして多用つとめよ
- 口上を云ひ違へまよ使ひ道草をせず暇を入るな
- 喧嘩す角力を取な餘所の子をイチャメもするな仕かへしもすな
- 虚言つかず人を欺さず正直な影日向なく身をばはたらけ
- 大口と女おだてと高慢な事すれば是等が野良の初めぞ
- 勝負をあらさふ業と川あそび無益錢つかひ隠し食すな
- 居眠りてあたら夜毎を過さず目あきて勵め讀書算筆
- 悪れたれた事を云ふな優しく下女と争ひ中悪くすな
- 御主人の内事を外へ出て善悪とも云ふな語るな
- 傍觀の中むつまじく我よりも下なる者の憐みて遣れ

- ひまあらば我家の父母へ手紙出し無事で務める事を知らせよ
- 落書や犬かみ合せ喧嘩して使ひ忘れて物を落す事
- 我親の門の通れと用なくば寄らぬが寄らざる奉公
- 敷入より泊らず歸れたゞ永居の兎角恐れあるべし
- 我ひとり務め働らけ傍輩の彼方こちらと譲り合はず
- 食事をば爲す度毎又味ひて見れば主人の皆御恩あり
- 身体をば大事より守り達者から主人へ忠義親へ孝行
- いさ掃事禮儀の外何事もしたらくみせず清く整へ
- 辛抱と堪忍するが何よりも身の出世する資本なりけり
- 利口ぶり言葉多きと片意地と短氣不律義戯むれどもすか
- 用事をば欠て芝居を見るのみか戻りて主より虚言と聞ふ合
- 正直と柔和よすれば御主人も傍輩中も可愛がるあり
- 商賣をよく覺へるが金よりも我一生の資本とぞ知れ

- 出世をばせんと思へば身をつめて善事のみ心うつせよ
- 手代より憎まれやうと内証の使ひに堅く断りを云へ
- 何事を人が頼もと御主人へ隠す事なら堅くする事よ
- 奉公を大事にするが何よりも我親たちへ孝行と知れ
- 主親の無理云ふものよあらざれば怨みもするな言葉かへすな
- 傍輩の粗相の主へ取なして善をうねむ告口をする事
- 人の身より善事あらば己れまた及ばぬまでも學ぶべきなり
- 人の身の善の云ふとも悪きと云はぬが人の誠ありけり
- 我だも心素直よ持あらず人の善あし語るべからず
- 算盤と讀書事を精出せよ奉公すとも上より立なり
- 粗相ゆゑ怪我あやまちも出来るぞと知りて静に物事をさせ
- 短氣ゆる身をほろぼすと慎んで疝癩氣隨氣儘おこす事
- 過ちがあらば直様あらためて断り云へよ負惜みすな

○己が身の務むる事は云ひかくし少しも人の善を學べし
 ○傍輩の上をば兄と敬ひて下の弟と思ひあはれぬ
 ○我よきよ人の悪き無きものぞ身を慎みて交りをせよ
 ○奉公の我身の爲の奉公ぞ人よ奉公すると思ふ
 エヘン先づ是だけの事で居坐いますから是を能く守りおさいト云
 ったら小僧さん達の中々口が悪くからヤイ骨皮野郎手前の誰も頼ま
 れて其様も多話言を云ふのだい其様も餘計な事を云って頭の二ツも
 張倒されぬ中よ自分の頭の上の繩を追が宜と云はれる人もあるか
 知りませんが其處のソレ學者の不身持醫者の不養生紺屋の白袴サ然
 が道人の云った事が若し疳癪玉も障ったら年よゆんじて眞平く(大
 喝采)

○意氣地の辨

諸君よ意氣地と云ふものハ負借みが七分よ瘦我慢が三分交って出來

て居るもので蚤の糞ほども義氣と云ふものが無いから意氣地の人間
 の不用物だと云ふ人が居坐います是の飛でもない見當違ひ全休意
 氣地と云ふものハ此人間の美德とも稱すべき物でフランメーの野郎
 拙者然らばの尻痴堅旦那を問はずお前はんの本當又實があるんだヨ
 いと吐す阿歴ッ猪妾の何故よ苦勞が絶ぬだらうの奥様を論ぜず貴賤
 上下男女の別なく一日も欠べからざる必要のもので居坐います若も
 人間として此の意氣地が無かつたらば技藝も進まず公益も起らず
 終よ無氣無力木偶の坊と同様成で居坐いませう(ヒヤク)然るよ野
 暮な人間の此理由を知らず漫よ意氣地を誹て云ふよの意氣地の寐兒
 仲間が糞意地を張の義も過お例へば藝者の仇吉が丹次郎も惚れ應
 來賃を擲って飽まで之を嘗やうとすれば米八の之を浦山歌おもつて
 借金を質も置き火の車を轉廻ながら丹次郎を自分の手に入れやうと
 するソコで丹次郎の氣力もなんよも無い蒟蒻の化物見たやうお人間

だから女のお情も依て飯を食ふとする者だから手もさく米八も粘着
たスルと仇吉の之を喚出して切齒扼腕シヤシーイと思ひ若し情郎を
横取せらるれば何様な面の皮を被ッてか朋輩の者に面を合せんと忽
ち糞焼丁筒焼桶木とあり三味線を賣るやら湯文字を賣る置やらして
丹次郎の需索も應じ一生懸命も機嫌を取て舊の情郎も仕やうとした
から米八も亦た屈せぬ家の諸道具などを賣たがモウ賣物も無く亦
つたゆゑ終ゝ大事を秘藏物を密賣して仇吉も顔頑たスルト仇吉も亦
た負ない氣もあつて顔頑ひ其ド々の鈍詰りの二人あがら身体を女郎
屋も持込むか左もなくバ旅猫とあつて田舎へでも飛で送なければ成
らない様もなつた又た丹次郎も飯の種を失ッて不乱散と爲り毎夜明
鳥の一曲を吐鳴り歩行き自分の惚恍を以てヤツトの事其命を繋く有
様も即ち其鈍詰りである且つ仇吉と米八の競争も罹ッて欺された者
の凡う何の位であらうか此の一事も於ても意氣地の効能といふもの

の果して焉もありませう(ヒヤ〜ノウ〜)又た鼻下長の客が馴染の
妓を争ふもの斯の道理と同じ事でも仕舞の身代を叩き潰さ無い者の
ない然るも其鼻下長の互も自惚て曰く我の真底腹からの情郎ありと
或ひの曰く我の既も夫婦約束をして居る者ありと一枚の舌を以て有
頂天も乗らるゝを知らずして頻も涎を垂し鼻毛を伸して先祖代々の
財産を棒も振て惜まざらんと欲す凡う斯の深海も蹈る者の假ひ三浦
國の上で特別の取扱ひも遇もせよ元々白狐が手慣の手練手管であ
る尤も天下への娼妓の數い多から中に眞の情郎も無いと云へ
ないけれども其情郎と云ふもの普通の客が成れる者でなかい即ち
舊の亭主だとか或ひの破戸漢だとか何せ情郎もあるのハ碌あ者ぢや
アないから此様な者も意氣地を張たとして何の經瓜の益も立ねい故
よ意氣地の色里の醜徳で決して貴ぶべき者でないといふ漢語交りの小
八ヶ間しい理屈を並べる野暮あ人もありますけれども是れ其一を知

ツて其二を知らず其六を知ツて其裏に一の亦る事を知らぬ者云
 ひ草では座います(ヒヤク)併しあがら一寸假し野暮人間一歩を譲
 ツて意氣地の藝妓が情郎を争ひ鼻下長の客が娼妓を争ふの張合主義
 又過すとすも尙多少の氣概と云ふものがあるから此處に至るので
 は座います諸君試みに思ひ給へ藝妓が情郎を争ふの只惚れた座の
 一念に拘はらず粘着權を奪はるゝの憤懣は發するのでは坐います鼻
 下長の客が娼妓を争ふのも是と同じ事で自惚の自由を妨害せらるゝ
 の憤懣は發するのでは座います而して其憤ふる者即ち氣概で御座
 いませう(ヒヤク)凡り天下の事の皆な氣概に成るもので彼の浪人が
 寄集ツて王政復古を成辰謀たのも幕府が民權を奪ふの憤懣は起り
 書生が苦學して卒業免狀を學校に戴くのも亦た習學の一念只人又負
 ての成らぬと憤懣するは依り上若し壓力を強くすれば下の者の憤懣
 は堪ずして自由の意氣地を張んとし外人が侮辱を逞しふれば國人

の憤懣は堪ずして万国對等の意氣地を張んと致します然れば意氣地
 の意味の悔敷と云ふのも同じ事で御座います凡り人の皮を被ツて居
 る者よして奪はれ壓せられ掠められ偷まれて悔敷と思はぬ者有
 りますまい若し之を悔敷とも何とも思ひぬ者あれば夫の無神経
 即ち木偶の坊と同じ人間では座います然るゝ野暮人間の意氣地を以
 て唯男女の事に係る者とする何たる誤解何たる野暮では座いま
 せう故に諸君の人間万事意氣地で無ければ成らぬと云ふ事を承
 知あらん事を冀望致します(大喝采)

○愉快と不愉快

諸君よ我々が此娑婆世界に厄介に成つて居る中より随分愉快な事も
 ありますけれども又随分不愉快な事も坐います即ち其愉快なる事
 を云ツて見ますれば二日酔いまだ醒す天氣のボンヤリ頭が重くお負
 り氣が鬱いでハチ困ツたものだと思ひながら據ころなく夜具を引被

ッて居るときよ思ひ掛ない頗る上等の別嬪がモン旦那と揺起して銘茶一杯を侑めて來ときい實は愉快で居坐います(ヒヤク)諸君も矢張り助倍了簡があると思へますね……夫から又た腹の中奇麗サッパリ何一ツとして邪魔をする者なく筆を執て机に向へば忽ち臍を宿替させるやう赤面白い文章の出来るときい實は愉快で居坐います又海も臨んで釣をするとき些とも風もなく波も静にしてポイントを釣を投れば忽ち極上等の蒲鉾や鯛の刺身ドッコイ蒲鉾や刺身が釣てい大變だが澤山魚が釣て浮世の事を忘るゝときい實は愉快で居坐います(ヒヤク)又た花の朝や月の夕べも親子兄弟打寄て常談を云ひながら酒を飲み茶を呑むときい實は愉快で居坐います又た某好色家が罪も科もない女房を追出し我日頃大熱々の寐兒を引張り込み未だ弘めいせねど夫婦氣取で鼻毛を伸して居りまゝ其寐兒が遊び好で金を遣ふ事水の如くあるが故に終も亦た前の女房を呼戻して更だ睦まじ

く暮す等の事あるときい實は愉快で居坐います又た自由の筆自由の文以て輿論を左右し以て民心を鼓舞するときい實は愉快で居坐います(ヒヤク)又た意氣相投するの友人と酒を飲み茶を呑みながら時事を語り夜半に至るも議論終も倦むる等の事ある時い實は愉快で居坐います又た大勢の友達と女郎買も行ったとき何した表裏の瓢箪やら相方が初會惚と來て能く親切な世話をして呉れるが爲に石井常右衛門でい無けれどエーと澄し込んで他の友人も鼻を明させ指を咬へて涎を垂させるなどの事ありし時は實は愉快で居坐います又た人力車を備ふて他所へ行とき車夫の脚が達者にして我身体も羽翼が生たのでい無いかと思ふ位の時の實は愉快で居坐います又た諸式が高直なるが爲に貧乏人の青菜も鹽をかけたやうに眞青も成て居るとき慈善家があつて能く金を出し此貧乏人を救ふて遣などの事あるときい實は愉快で居坐います又た一杯機嫌も乗してブラク散歩するとき新

月の水も寫り夜の景色の佳とき、實は愉快で座います。又、途で夕立も逢ひ、三進も行ない、困つて居る處へ極お察しの宜親切、お別嬪さんがあつて、彼方サア困りで座いませう、幸ひ私しは蝙蝠傘が座いますから、トは究屈でもマア是へ這入て入ッしや、其邊まで一所も参りませうと云ふので、料らずも美人と相合傘で歩行さ、どの事があつた時、實は愉快で座います。又、我志操を固くして、以て我權利を失ひぬとき、實は愉快で座います。(ヒヤ)扱て愉快の事、はまだ澤山は座います。けれども先づ此位な事にして、置て不愉快の方へ移りませう。あれは道を歩行とき、突然風が吹て來て、目の中へ砂を入れ、或ひは帽子を吹飛して、追駈させるなど、實は不愉快で座います。又、他所へ行がけ、傘を持すも出で歸り路で大雨も出ッ交すなど、實は不愉快で座います。又、折角傘があつて、用は足す、雨が斜に降て來て、衣服のビツッヨリ濡れ、殆んど溝鼠の化物見たやうなる。

あ、この實に不愉快で座います。又、運動かた、歩行て行度と思へば、車夫の口八ヶ間しく、乗車を勧め、馬車馬丁の旦那と袖を引張る。あ、この實に不愉快で座います。又、懷中の一支も金のないとき、生憎と下駄の鼻緒の切るあ、この實に不愉快で座います。又、黒狸が月蝕を拜んだやう、武骨野郎が小野の小町のやうな別嬪と同車して、頬邊押つけ、バアとゴロ、遣て行のよ、此方の業平のやう、お好男子であり、あ、この同車の相手があ、この實は不愉快で座います。(ヒヤ)又、た急ぎの用向があつて、他所へ出やうとする時、長ッ尻の客が來て、何時までも下らない事を饒舌して居るなど、實は不愉快で座います。又、た風か美人の髪を吹て、眞白な足丸で、見へるのよ、肝心な處の見へぬなど、實は不愉快で座います。又、た氣候が定まらあ、いで天氣かと思へば、雨が降て來る、雨が降て居るかと思へば、何時の間よ、か天氣よなつて居たり、或ひは寒いかと思へば、暑くなつたり、暑いかと思へば、寒く

爲たりするあとの實は不愉快で御座います又た乗車の途中で車夫が酒手をネマリ夫が爲る車の運びも遅く随って先方へ行時間も遅くあるあとの實は不愉快で居坐います又た友達同志で打寄て仲宜く酒を飲しよ中酒乱の者ありて鍋を抛げ井鉢を打こわし亂暴狼籍人の酒興を妨ぐるなどの實は不愉快で居坐います又たペラも費し色々言葉も費して藝者を口説よ何と云つてもウンと返事をしあいなどの實は不愉快で居坐います又た酔た勢ひに妓樓へ登り翌朝に至つて懐中を探れば一錢も無きが爲に據ころあく馬を引張て歸るあどの實は不愉快で居坐います又た馬を引張て歸らうとすれば先方で歸さず空しく行燈部屋に坐つて居るなどの實は不愉快で居坐います又た廻し部屋に敵娼を待て眠られぬい處から吸度もない煙草を吸て目玉をバチクリくして居る時バチクリくと草履の音がするから此奴めたと急は狸寐をして居れば登り料らんや若い者が油注よ来たあどの實

は不愉快で居坐います(ヒヤ〜)又た今夜の寐て吉夢を見度もものだと思へば却て盗人は翠玉を掴まれた夢を見るなどの實は不愉快で居坐います又た時を期して某處へ行んと思ひ停車場へ行ハ生憎涼車の出た處なとの實は不愉快で居坐います又た酒を飲た後で汁粉を備められ飯を食た後で酒を備められ胸張り腹脹れるあどの實は不愉快で居坐います又た浮世の事ハ兎角は儘あらぬものとの聞あがら何事も我思ふ通りよあらない杯の實は不愉快の大関で居坐いますト是で仕舞(大喝采)

○廻り燈籠の説

諸君よ諸君も御承知の通り太陽様が西に潜り込しやればお月様が東に飛出さつしやるお月様が西に潜り込しやれば又た太陽様が東の方へ飛出さつしやり一陽一陰五雨十風寒來暑往秋收冬藏三百六十五日グル〜グル〜環つて限のさいもののは是れ天地の廻り燈籠で

御座います天地よしして既廻り燈籠の如くで御座いますから人間の
 方よし於ても萬事廻り燈籠で無ければ成りません(ヒヤク)扱て廻り燈
 籠と云ふもの元子供のお断弄物で其の製造法の何様な物かと云へば
 圓い行燈見たやうな物が中の燈花の油煙が揚るよ從つて種々様々の
 影法師を寫してグル〜〜と廻るので座います但其影法師
 よハ播木よ羽が生て飛のもあれハ播鉢よ足が生て駈るのもあり三ツ
 目一口の化物もあれば二頭よ八足の怪物もあり轆轤首もあれば福助
 頭もあり其外奇形怪体の者がグル〜〜と忙しく廻つて中々
 面白くもので居坐いますソコで此廻り燈籠と云ふもの何年の項よ
 何の何兵衛が發明した者か其邊ハ未だ調べて見ませんから分りません
 けれども先づ其發明人の穿索ハ暫く置いて實よ世態人情を能く寫した
 もので御座いますから若も明治の今日是を發明しましたならば屹度
 専賣免許を受けて大金が儲けられるだらうと思ひます(ヒヤク)故に瘦

我慢者の能く云ふ七轉び八起も此廻り燈籠の理合と同一事なれば
 一治一乱一盛一衰の數も亦た廻り燈籠又た塞翁の馬も矢張り此廻り
 燈籠よ理合の同じ事で居坐います畢竟するよ人間の何事も太陽様も
 お月様と駈つ競をして人生五十年後度ハ廻り燈籠をして終るので早
 く云つて見れば人間の一生ハ小兒の遊びをして居るやうなもので居
 坐いますから能く考へて見れば人間も馬鹿〜〜しい者で居坐います
 故よ壓制束縛の影去れば自由權利の影來り攘夷鎖港の論止ハ通信買
 易の説起り官權が振へば民權頭を持上げ民權が漸く伸れば王權が復
 た興り其變遷の窮りなきハ恰も廻り燈籠の廻つて窮りの無きが如く
 で居坐います(ヒヤク)又西の方の幸堀漢が時機を得て中天よ飛あが
 れば東の方の因循奴子が舊慣を棄て大海よ躍り込み先進の驍將軍が
 美髯を捻繰て雲界に駭屠すれば後進の齷齪生が煉髯を生して泥中よ
 迂餘〜〜し寺子屋よ子の曰くの聲が止ハペンキ塗の學校でアイウエ

オの聲が初まり半可通子が練味増臭い女房を追出せば生意氣治郎の花柳の婦を尋び今日の旦那株の昔日の鎗持向ふの私窩子の隣の奥様人間万事廻り燈籠富貴を僥倖も博するも驕るべからず亦た安ぞ大地震よ逢て九地よ轉げ落るを保たん一台の濁酒を裏店も樂しむと雖も侮ざるべからず亦た豈よ好き手藝を得て俄大盡の仲間に這上る事おしと爲さんや綿蠻たる黄鳥も梅花枝を辞するも及べば其宿を黄梅生ずる所の毛虫も譲らざるべからず騙懸たる粉蝶も芳草露を帯るも逢ハ其巢を腐草化する所の螢火も與へざるべからず一去一來新陳更替の萬物の免かるべからざるの數で坐いますから人の世の中誠よ一ツの廻り燈籠で坐います(ヒヤ〜)而して今の人の争ふて奇態を出すの猶ほ廻り燈籠の化物を寫し出すが如く人をしてピツリして膽玉を潰さしめブル〜慄へて胸を驚かさしむるものが澤山では坐いますから今りの廻り燈籠の有様を一寸お話し致しませう(謹聴〜)

扱諸君を眼を開いて彼の化物を珍覽じろ第一番よ走る者の何かと云ふよ高帽子を戴いて頭ハ素敵よ大きいけれども手足の細い事と云つたら蚊の臍を削つたやうで其腹の凹字の形をして居るから或ひハ臍が無いかも知れず併し腎があるから此毒よよつてヒヨロ〜と歩いて居るやうなもの、若しも奈良の大佛が一屁放てば何處へ吹飛ばされるか知りませんが是の即ち佛國ナポレオンの幽霊で坐います(ヒヤ〜)其次よ走る者の何かと云ふよ狐の身体も猫の頭が着て右の手よハ臍を掴み左の手よハ臍をヒン握り劔のやうな磨澄した爪を引立て錦のやうな尻尾を引摺りて走りすが其走る事が急なれば忽ち轉び轉べば忽ち起き腎の邊よ光りを發してペラ〜の蛭子を振出す有様の丁度大黒天が小槌を振って小判を出すやうな鹽梅是の近來箱根以東よ生ずる所の化猫では坐います其次の何かと云ふよ面附の地藏も似たれど賤の豺狼の如く左の手よ餓鬼を抱へて餡餅を與へ右の手よ

の馬鹿を捕へて其臍をホチクらうとする者は是の目下市中は徘徊して
 貧民を苦しませる所の擬紳獅で汚座います(ヒヤ)其次の何かと云
 ふ鼻梁を天狗よし耳朶を兎よし大法螺と吹て人を驚かす所の新聞
 鬼者で汚座います其次の何かと云ふ錦の衣服を着て錦の帯をゆめ
 其体裁の美麗あれども時あつて襦袢を出すは是れ虚嬌と名くる者の
 怪奇り其次の何かと云ふ鼠も似て毛色の黄尻尾あれども露のさず
 走る時の點智くくと叫ぶ此は是れ黄獭と名くる魍の變身で汚座いま
 す其次の何かと云ふ面色花の如く馬腹鹿足欄扉に乗て走る此は是
 れ鹿屬の一種で汚座います其次の何かと云ふ一人の美人が瑤の興
 に乗て走る是の一寸真人間も似て居るやうなれども俳祥時は瓢へせ
 ば忽ち獸骨を露す即ち是れ馬骨の變身で汚座います其次の何かと云
 ふ頭の尼姑も似て腹の木魚の如く袖を以て腹を隠しノコノコサイ
 く酒亞く突々として走る是の赤い信女が又孕むの肖像で汚座

います其次の何かと云ふ人面狗身尻尾を垂て諂ふが如く餘の鬚に
 絶つて走る此の食を朱門乞ふの牟愚犬で汚座います扱是等の怪獸
 が相追ひ相逐てルルくくと廻り一社會を作つて居りますか
 ら今の社會を呼で廻り燈籠とするも決して開放題や出鱈目で汚座
 いますまい新陳交替の固より欲する所での汚座いますけれども社會
 を擧つて化物の集積とするに至つては實は羣靈顔をせざるを得ざる
 譯で汚座いますが併し諸君の如何思し召れますか(大鳴采)

○父母の説

凡る此の世の中は物事の大小を論ぜず輕重を問はず皆夫も其父母
 と云ふものが有て出来るので決して父母あくして出来るもの汚座
 いません故に賢を賢として色も易よと理屈を云つた孔子様も色即是
 空とイヤと悟つたお釋迦様も皆お父母があつたからこゝろ生れたので
 決して木の股や竹の中から出さしつた譯で汚座いません尤も桃太

郎の桃の中からビヨコリと潜り出しお多さんの館の中からニヨコリと
 飛出したと云ひますけれども假ひ桃も致せ館も致せビヨコリと出て
 来たらし其出て来た元の桃の桃太郎の父母館のお多さんの父母で座
 います(ヒヤ)ソコで此順で推て行て見ると風雨霜雪の草木の父母
 田畑を耕すの五穀野菜の父母教育の誘導の智識の父母勸工奨商の富
 強の父母自由自主の開化の父母壓制束縛の禍亂の父母激論直筆の罰
 金禁錮の父母遊惰放蕩の破産の父母燒芋牛房のお屁の父母虚飾贅澤
 の金庫欠乏の父母其外士人として忠義を重んずるの國勢振興の父母
 となり蒼生よして卑屈を甘んずるの民横暴の父母とあり院本葉頭
 の處女が淫よ走るの父母となり佛參觀劇の後家が貞を破るの父母と
 なり山師の辨茶羅を以て資本を釣出すの父母とあり白面書生の法螺
 吹を以て名聲を買出すの父母と爲し腐穢怪談の自惚才子の父母の如
 く屁ッ鋒演説の落語家の門よ入る父母も似たり貧乏身代の夫婦喧嘩

の父母と爲て忽ち摺木摺鉢の合戦を生じ物價の騰貴の悪漢繁殖の父
 母となつて終に強盜放火の大罪を生み朋友の交り愈々厚ければ共
 同一致相助けるの良父母とあるべく男女の痴情益々濃ければ
 て亡命情死の愚父母とあると物皆な父母がおりますけれども兎角
 よ善い父母は少なくて悪い父母の方がドツサリ多座いますから人
 たる者の能く其父母を擇んで善良の子を生むべきで座います(ヒヤ
)而して其父母の中でも最も善き物の何かと云へば即ち飯の父母
 で座います人最し飯の父母も事ふる誠意誠力を以てすれば必ら
 ず富貴の善い子を生み誠意誠力を以てしなければ必らず飢渴の悪い
 子を生みます然れば飯の父母の尊ぶべく重んずべく大切よすべく丁
 寧よ取扱ふべきで座いますもので飯の父母どの何の事を云ふのか
 と云へば即ち耐忍勉強で御座います若し人として此耐忍勉強と云ふ
 事を忘れさへ仕なけれは何様事でも出来な事ありません故よ

古人も勉強の幸福を生むの母と云ひ又た蟻の小なりと雖も能く高き塔を築くと云ひ又た桑葉の能く美麗の綾羅を出すと云ふ事どの皆是れ耐忍勉強の能く大業を成すと云ふ事では座いますから常は忘るべからざるの飯の父母常は忘るべからざるの勉強耐忍では座いますとの云ふもの、爾口で云ふやうい何事も行かぬものサ(大喝采)

○泥坊の外は泥坊あり

前の演説の少し堅過ましたから今度ハズツと和かな昔話話を一ツ致しませう……昔話話しと云つても爺さんの山へ芝刈は婆さんの川へ洗濯よと云ふお話しして御坐いませんから諸君のお積りで……(謹聴)エヘン昔し或富家の息子どのが女郎買へ行て夜を深した歸り路旅の路伴れ世の情け何でも賑かなのが宜しい若旦那の……のがお嫌ひだから大勢でお見送り致しませうと云ふので相方の女郎の勿論幫間から茶屋の女やら大勢で取巻で常談を云あがらッヤ

くくくと騒ぎあがら歸つて來ると此方の松蔭から黒装束を着て黒頭巾を被つた大の男が五六尺もあらうかと思ふほどの大刀を抜てマッとも何とも云はず出て來て彼の息子の襟首を鷲掴みお掴んで矢庭へ捻伏ましたスルと今まで死なら諸とも三途の川を手を引と云つて居た相手の女郎も又た命を捨てても旦那の御恩の忘れせんと云つて居た幫間も皆な膽を潰して一目散に逃て仕舞ました跡で聞て見たら女郎も幫間も七日七晩目を廻して居たから定めし死んだらうと思つて棺桶へ入て仕舞と流石の娼賣人だけの事があつて棺桶の中から香篋を取し出て來たさうでは坐います(ヒヤ)イヤ常談の扱置て彼の泥坊の息子を引起して泥坊ヤイ手前此夜更に女郎や幫間なんぞを大勢つれて歸つたの何の爲だ有休に申せ最し虚言を吐と此の大刀で横ッ腹から團子刺しするぞト彈は玉散る氷の及と云ふやうお奴を鼻の先へ突附られたから息子のブルく震へあがら息子

ハイ大勢の者を伴て歸つたの貴方のやうか人又出られての怖いと存じて用心の爲に伴て來たので御座います 泥坊用心の爲に分つたが又た何の爲に自己のやうなものを恐れるのだ 息子貴方のやうな人を恐れるの第一よのヒヨツと身体又怪我でも蒙つて成ぬと思ひ又二ツよの金や衣服を剝取られて成らぬと思ひ又三ツよの若し左様の事があつて世間へ外聞が悪いと思ひますゆゑで御座いますといふと泥坊の大口を開てアハ…… アと笑ひ 泥坊イヤハヤ手前ハ餘ほど大馬鹿の三太郎だ成ほど其様か大馬鹿の三太郎で無ければ女郎や帮間の食ものよあるまい…… ヤイ面を下て自己の顔を見ないやうにしてヨロケ聞け…… 若し之を芝居するど相方キツパリとありとか何とか云ふ處でス 泥坊手前が自己の様を恐れるの第一身体又怪我でもすると成らぬと思ふてだとい何の多言言實よお茶ン茶羅可笑くつてお臍で茶を沸すぢやア無いか尤も手前も限らず

世の中の人の少しの怪我過ちを知て其大なる怪我過ちを知らぬ者が多いナゼなれば身又怪我をする事や盗賊や鬼や蛇よりも世酒色ほど恐ろしい者の無いぢやアいか酒色よつて怪我を蒙り身を失ひ家を亡した者の昔しから今まで何の位あるか知れん例へば盗賊が刀を出して手前を殺さうとしても元々金が欲さの泥坊で命を取た處が何の益にも立たないものだから金さへ出せば命の助かるが色と云ふ刃の先を差付られて自分も氣の附あい油断から大金を振替て腹の中をえぐられ命を失ふ大疵の再び治する薬あるく酒と云ふ先よて臟腑を突破られた大疵は是も治するの薬あるく酒と云ふ先よ大馬鹿野郎の三太郎でいかか(ヒヤク)扱て其次よの金を取られ衣服を剝れるのを恐れての用心だと云つたが是も頭を隠して尻を隠ささい大ベフボウだナゼあれば泥坊が丸裸体にしたからとて手前の

身体が明日から潰れて仕舞と云ふ譯でもあいが泥坊を怖がって用心
 の為だと伴て来た女郎や帮間こそ手前の金を取り衣服を剽とるのみ
 か家も藏も田畑も剽とる泥坊との知らないか(ヒヤ)又た其次に
 世間への外聞が悪いと云つたが是も阿房の云ひ草だ全体手前が世間
 へ外聞の悪い事を知れば其身持の放埒を何して止まいのだ身持放埒
 ほど世間へ外聞の悪い事無いで無いか其放埒が積つての縦ひ千
 兩万兩の身体でもツイ輕々と掃又振り荷擔ぎ人足となる者もあれば
 勘當を受けて乞食非人となる者もあり或ひに分散欠落する者もあり夫
 も自分ばかりあら未だしも宜が先祖や主親や一家一門までの顔を汚
 す此上もあいな世間の不外聞との思はあいか手前の自己を泥坊だ
 思つて居るけれども手前こり自己は勝つた大泥坊だナセ手前を泥坊
 と云ふかど云へば第一親の之恩を忘れて親の目を盗み先祖からの財
 を盗み取るの泥坊だから其天罰が報つて来て又た手前が頼みよする

手代や小者が直よ手前のする事を手本として手前の目を盗み主人の
 物を盗み取るやうよあるのだ夫から其剽取た手代や小者の天罰の直
 よ酒色の爲は剽取れて一生を過るとい誠よ可愛想あもので無い
 爾して此手代や小者よ不義ををしへて一生を誤らし泥坊仲間
 に入た泥坊の大元を尋ねて見ると盗人をとらへて見れば我身あれ
 且にも油断をして成らん自己のやうな泥坊よりも油断のあらない
 不用心なもの手前が用心よと特んで連れて来た女郎や帮間だ其不用
 心を頼みよならあいな女郎や帮間や其外の者よりも頼みよあらない
 不用心なもの手前が道つて居る手代だ其また不用心よして頼みよ
 あらい手代よりも未だ頼みよあらない不用心なもの手前が馬鹿
 根性ツ骨だマカ手前よかざらず世の中よの特みと思つて特みよ
 らず用心と思つて用心よあらないのか却つて身の害とある事
 山にめる例へば儒者の仁義を特みとして其仁義よ縛られて道の根本

を失ふたり劫主の悟道の特みよして佛性をくらまし博識あるもの其
 博識を特みよして我慢を發し劍術者の其劍術を特みよして不覺を取
 り金のある者の其金を特みよして子孫を失ひ智慧のある者の其智慧
 を特みよして身を滅ぼし辨舌の宜もの其辨舌を特みよして誠を失
 むふの類の幾何もある或人の句「味方してまた裏がへる地黄丸」と云
 ふ事があるが實に此の通りで内損をしあいやうよと用心に地黄を香
 だり宜けれど其飲だ地黄を特みよして却つて内損する事もあり又た
 身代を大きく化やうと思つて資本と金を借たの宜けれど其借た金の
 利足も追れて却つて貧乏する事もあり身分の身体が速者あのを特み
 よして不養生を構はずよ命を縮める人もあり此外用心とあもつて不
 用心よある用心多く特みと思つて特みとならあ特みも多ければ其
 用心とあるべきの用心を用心とし其特みの特とあるべきの特みを特
 みと仕なければ成らん(ヒヤ〜)左りあがら其用心とすべきの用心其

特みとすべきの特みの中を手前のやうか馬鹿者よに分るものでいな
 いから是からナト學問でもして最少し智慧袋を大きくしろト永たら
 しの泥坊の講釋を聞いて息子の太おゝ感心し 息子「イヤどうも有難い
 御教訓も預り誠に骨髄も徹しました貴方の古への聖賢も劣らあ
 人と思ひます私しの貴方を決して泥坊とい思ひません 泥坊手前
 の又た分らあ事を云ふ夫だから最少し學問をして利口よ爲れと云
 ふのや自己を賢人あとの實は馬鹿事だ抑く知る者の云はず云
 ふ者の知らずと古語よもある通り云ふ事の善のを以て賢人とい云は
 れず只云はずとも身の行ひの善のを賢者と云ふべきた自己が若し賢
 者あ何れも手前の悪い事を戒めずして自分の身の行ひの悪い處を直
 すのだが自己の泥坊を商賣よして居て却つて手前の非を責るのは是
 が何しても泥坊の泥坊たるべき証據で誠よ據ころのない譯だ併し世
 よ人の悪い事の能く云へど我身の事の願みあ我同類の多いもの

だ自己あんぞの泥坊をするの、大切の命を元手よして泥坊をするの泥坊だから同じ泥坊の中でも正直者と云って貧位なものだが世よの命も元手よせず未練卑怯よも美顔をして世渡りをする泥坊もあり三衣を着て人を迷はす泥坊もあり儒の服を着て聖賢の語を盗む泥坊もあり酒色を以て人を陥れる泥坊もあり主人や親の目を盗んで家を潰す泥坊もあり其外泥坊の數の多き事、濱の真砂の數よりも多し左りあがら人間と云ふ者の性善のものあれば自分の悪いのを自分で善との思はさいものだから自己のする泥坊が元手の入ない宜商賣だからとて之を子孫へ傳へやうと思ひす手前が酒色遊興を面白いと思つて之を我子や手代よさせやうと思ひすたらう子孫も亦た親の泥坊を宜と思はず家來も主人の酒色遊興を結構な事と思はず是が人よの自然よ忍びない性善の徳よして己れよ責き本心のありながら我が人欲よ暗まされ奪はれて身を失ふとの實よ悲しい事だ手前の

主親家内の者の目を掠め金銀を盗み出すどの思へど酒色の爲よ奪ひ取られ身を失ふ事知らず自己の幾多の人を奪ひ取るとの思へど私欲の爲よ此上もあい大切の我が本心を奪ひ取れ一生涯泥坊をして身を失ふのだ身を失ふと知りつゝ身を失ふの、身を失ふの根元あるが身を失ふの根元を知りつゝ身を失ふの天罰の爲よ所併しあがら手前のやうな世の中の息子手代の盗みをする泥坊と自己がする泥坊とを比べて見ると自己の泥坊の軽くして手前のやうな主人や親の目を盗み先祖の物を横取して身を失ふの泥坊より此上もあい大泥坊だから手前も早く泥坊仲間を外れて誠の人間の道よ入るが宜と忽ち九裸体よして突飛したと云ふ話しが御坐います昔しの泥坊の同じ泥坊でも随分學問をした泥坊があつたと見へます(ヒヤ／＼)ケレども是れ泥坊が話しをした事で御坐いますから外の事知らずして只世間よ泥坊の仲間が多い事を話し仕たもので御坐いますが諺よも性道よ

よつて賢しで何事も其道よくよれば皆な其道其類の多き事を知るも
 ので御坐います即ち商人も聞ば世の中の事ハ皆商ひだど云ひ百姓も
 聞ば世の中の七八分ハ皆百姓だと云ひ歌人も聞ば蛙までが歌詠と仲
 間茶人も聞ば雨の漏る破屋も風流釋迦も尋ねれば國土山川草木まで
 が皆佛孔子も聞ば三軒の家も必らず一人の賢者ありと云ふなど皆
 夫く其道よつて我田へ水を引きもので御坐いますから道を知る人
 も近付て善人仲間の多い話しを聞て自分も其仲間入りをするやうに
 心掛るが肝心で御坐います(大喝采)

○苦樂の金錢の有無よらず

諸君よ只今の永たらしい泥坊の昔し話しをして噓かし御退屈で御座
 いましたらうが道人ハ誠意地の悪い男で人が退屈したと云ふと猶
 や退屈をさせて見たい性分で御座いますからモウ一ツ退屈させるや
 うも話しを致しませう(謹聴)扱某處も居宅借家を合せて都合百軒

の家を時て居る金持の人がありましたが天災と云ふもの仕方が無
 いもので或時の大火事ハ其借家の九十九軒を焼らす焼て仕舞ました
 然れども元來金持の事で御座いますから世渡りも困らずお負も居
 宅も附た土藏も八ヶ所ありますゆゑ何一ツとして不自由のない身代
 で御座いますよ何云ふものか此主人の借家が焼た後といふもの頻
 り胸を痛め明暮よ心を苦しめて花を見て散た借家の事を思ひ雪を
 見て消た野原と同じき地面を悲しみ月を見て月々家賃が取れぬ
 を怨みてア、自己のやうな不仕合せハ因果を者ハ世もあるまい此様
 な不仕合せを因果で生て居るよりの寧ろの事死で仕舞た方が遙か増
 だるうなどと心配をして居りますと此家へ久しく出入をして居る土
 撥ぎの親父か来て此主人の病氣を氣の毒と思ひ或日主人に向つて云
 ふよハクレハア旦那どんや自己がハアお前様を見るのよお前様ハ氣
 病を出さしつたアと思ふだが氣病チツものア中々お醫者様の藥を飲

だアからッて全快ものぢやアありましねへ是をハア打棄ッて置ッし
 ると命も危険かんべと思ひますだア夫で自己がハア家も奇妙不思
 儀あ哭ひがありませだアが此まじさいせへ爲りやア只だ七日の間で
 全快ますだアお前様ア命が助り度と思はッしやるなら自己が云ふ
 通りよ任さつしやッたら何だんべエ 主人「夫い有り難いお前が其ま
 じないで直して呉るなら直も頼み度 親父「夫ぢやア其まじないを
 して進ぜますべエ自己のハア哭ひナウホア何も六ヶ敷事ぢやアあり
 ましねへ今から七日の間だ自己等が家よ来て自己を眞實の生の親だ
 アと思ッて何でも自己が云ふ事を七日の間ハ屹度背かねへやうにす
 るだアと彼の主人を伴て我家へ立歸りましたソコで主人ハ其親父の
 家へ行て見ますると住居も庭も一所よしてもタツタ三四疊敷ばかり
 の破屋でお負よ越を以て屋根を拵へ古俵を以て疊の代りよ敷てある
 やうお實よ目も當られさい住居で御座います然れども例の親父ハ澄

アし込で主人よ向い 親父「ヤア是れ奴子チ手前ハ今日からハア七日
 の間ハ自己が眞實の悴だアから何でも背ひぢやア成んねへぞ若し自
 己の云ふ事を背くと胴骨を打挫くから爾思ッて居ろト一本の天秤棒
 を渡して親父と同じやうよ土を擔がせて何様も苦しまふが何様な
 よ汗を流さうが親父ハ平氣の皮も負よ三度の食物と云ッたら麥が九
 分よ米一分の割だから丸で麥ばかりを食やうだし又時とするると其近
 所よ落て居る菜ッ葉を捨ッて来て麥雜炊を拵へて食せたりして朝早
 くから夜遅くまで責て使ひますので流石の主人も苦しみよ堪かね今
 日ハ逃て歸らうか明日ハ脱て歸らうかと思ひあがらもイヤハ命の
 助るまじあひだと覺悟してトウハ六日間を過ましたスルと其晩よ
 親父ハ主人よ向ひ 親父「ヤイ奴子チ手前ハ自己の悴よあらねへ前よ
 やア何だか身体だ悪いチウ事だッけ自己等が家よ来て末だ身体が
 悪かどうぢやい 主人「ナニ此家へ參ッてから毎日ハ責使はれるの

と粗末な食物を食せられるのと小屋の汚穢のよ困って病氣も忘れて
 仕舞ました 親父「さうだんべ」手前が病氣チウゐナ結構な家ゝハア
 住て旨へ物を食て身体を使はねへで樂をして居るからハア色々の愚
 痴が出て來て不足の心が起るから病ゝなるのだア夫からハア自己等
 が家イ來ねへ前ゝやア色々の事チ心配して夜もハア寐らねへチウ事
 だッけ自己が家イ來てからチウものア轉ぶと直ゝハア寐らチウ事
 皆あ盡の働きが強ひからだア万病の氣の滯留りより起るチウ事があ
 るだアが全体氣の滯ふるウチあア足事チ知らねへのと身を樂よして
 暇だアから心を使ふのから起るんだア何でもハア物事チ苦よじやう
 者なら自己等がやうあ今日食て明日の食ふ物が無けらゝやア毎日氣
 病を出して居る筈じアけんど有が難事ゝやア片時も身体ゝハア樂チ
 ウものチ仕ねへから心を遣ふ暇もあゝやア晝間働らさやア夜は草臥
 てゴロリと轉びやア安樂世界だ「養生の只はたらくゝ如のあし流るゝ

水の腐らぬを見よ」此歌の通り病の根本チウものア身体もハア樂よし
 て心を遣ふから出るのだアと云ひ聞せて其翌日の暗い中から起して
 昨日ゝ數倍の土を擔がせて責使ひましたスルと主人も今の苦しきよ
 堪兼まじなひの事も打忘れて思ふにの扱々自己ほど世ゝ因果なもの
 があるまゝい家ゝ在ての疝症の爲ゝ晝夜心を苦しめられ此處ゝ來ての
 乞食同様の親父ゝ資られて日夜身を苦しむ斯る不合せの身で長命
 をして居た日ゝ何様な愛目ゝ逢ふも知れんから寧ろの事今宵此處
 で首でも縊ッて死んで仕舞か知らんとまで覺悟を致しましたスルと
 其夕方ゝ親父の主人を傍近くへ呼寄せ 親父「コレヤア奴子ヲ手前の
 辛拖強い奇特なものだアから此貧乏の親父と縁を切て手前の身の爲
 となる處へ養子ゝ遣て遣るべゝから自己と一所ゝハア來が宜だアと
 主人を伴て或る大きな門構への前へ行き 親父「ヤア手前の仕合ゝ奴
 だアぞ此様も乞食のやうな親父の子でありあがら今から此のデカイ

家イ養子よ遣べエから是から手前ハ此家の旦那様だア其上まだ仕合チウなア女房も餓鬼も手代も小者も下女も皆なハア手前が古い馴染だア其外もヤア別家の者も澤山ありヤア金もあり諸道具もあり此家又附た土藏も八ヶ所あり又この家土藏の外もヤア九十九ヶ所の地面もあるだアから此親父の身代も比較て見りヤア九万匹の牛の一本の毛とも釣合ねへ位の金持だア何とマア手前の果報者ぢやアねへか夫だアけんご餘り果報が過ると又た病氣が出やうも知んねへが其時よヤア此親父が子であつた事ヲ思ひ出せエ自己が子であつた事ヲ忘れなよ今から此家イ養子よ遣べエから親子の縁ハ是かざりだアと云つて主人を戸の内へ突入ましたら手代や小者の立騒ぎ旦那様のお歸りだと云ふので妻子番頭別家の者も喜びて出迎ひをいたしました時主人の嬉しさのまゝ躍り上つて横手を打ち大おほ感心して成程親父のまじないの奇妙奇休だ我の實又氣病を治し命を助り新又富貴を得たり

し我身こり古今稀なる果報者だと云つて喜んだと云ふ話しが御座います(ヒヤ〜)此話しの誠又馬鹿氣たやうでの御座いますけれど右の親父の手段の中々面白い遣方だと思ひます成るほど百軒の家を持た富家の主人だと思へば九十九軒の家を焼たのり此上もあいな仕合せのやうで御座いますけれども又た貧乏な土撥りの息子が此様な家へ養子よ來たのだと思へば此上もあいな果報で御座います是を思へば人の世の中と云ふもの身代の宜のが樂しみをさせて呉るでもなし貧乏な者が苦しむでもなし只各自の了道一ツで樂しみも出來苦しみも出來るので御座います(大喝采)

○學者の法螺

諸君よ法螺と云ふもの古しから吹者が種つて居りまして決して並の人間が吹もので御座いせん又昔しの吹者が種つて居たからと云つても只無暗に手前の勝手を以てアウ〜と吹き立た者での御座

いません昔時の軍人と修験者との道具もあつて居つて即ち天狗然たる修験の大先達が末社の木葉を伴て靈山に登るの時之を吹て山靈よ告るか又の武田山鹿の軍學者がスハ鎌倉の一大事と云ふ時よころ味方の大將よ附てカ、レー〜ス、メー〜の下知と共よプ〜と吹立たもので之が公評を下せば實よ馬鹿〜しい鳴物で御坐います(ヒヤ〜)故よ只今での軍學者も全く之を廢して喇叭よ換へ先達も亦た昔しのやうよ到る處でプ〜と吹ものゝあく只田舎の頑愚連が湯殿昆布ヶ原の山参りよ吹立るのを時々よ聞ばかりで座います然るよ近來の一種の法螺が世よ出て來て頻よ吹ものあり而も大日本の大都會たる東京の真中よ於て吹との實よ不可思議千万の一事での御座いませんかあ負よ其法螺を吹者の學者と肩書の附た者よ多いと猶更不可思議千万での御座いませんか(ヒヤ〜)而して其法螺の巨大事と云つたら古代武藏坊辨慶が吹た法螺の類どの違ひ一吹の下よ

大勢の耳を聳よせしむるほどの大音を發します今うの音色を大別すれば妄〜と鳴ものあり凡〜と鳴ものあり論〜と鳴ものあり吠〜と鳴ものあり沸〜と鳴ものあり頑〜と鳴ものあり即ち其法螺よ曰く世界の廣しと雖も我の調子よして之を呑むべし古代の選たりと雖も我の能く暗んじて之を饒舌るべし國家を治むるの屁を放るより易く人民を御するの糞を垂るより易し我の左の脚よ亞米利加洲を踏で右の足よ歐羅巴洲を踏み渺茫たる大洋よ跨立して常よ全世界を睨み凡そ天地間の事は一ツとして知らざる者なしと妄〜吹立る者の横文字の大天狗即ち生洋學者の法螺では坐います(ヒヤ〜)我の民權御し實の大問屋あり凡そ權利自由の名を附る者の皆來つて我よ問ふべし人よ權利あれば狗よも亦た權利あり吁嘆すべし天下の人民の概ね腰拔よして權利自由の何たるを知らずと云つて凡〜吹立るもの屁ッ鋒論者即ち糞の權利も味噌の權利も無茶苦茶よ心得居る民權

學者の法螺でひ坐います(ヒヤ)娑婆の事ハ大小と亦く方圓と亦く
 若我が眼玉も看破せられ大よして仁王の膽玉小にして瘦蚤の墨
 玉輝蟒の鼻毛も我皆これを知る加ふるよ一撃の下大強國を打破る
 の軍略も一耕の手大曠原を開墾するの農術も又ハ坐ッて居て世界
 の富を占るの商法も又ハ臥して各國の工を善するの工藝も屹度諸合
 て我これを能くせん天下の人民皆我を以て父母と仰げ我の社會
 の耳目人民の模範あるぞと啡く餓鬼の吼るが如く耳聒しく吹立る
 者ハ即ち新聞記者の法螺でひ坐います(ヒヤ)赤鷲の事業ハ總て自
 己の氣に入らぬ世界の本尊ハ獨り毛唐の國ハありノウ懐しや孔夫子
 ヤレ慕ハしや朱文公何事も先生の云ハれた通り少しも其言に違はず
 嗟今の世の中ハ見るもの聞もの皆ハ小癩ハ障る我ハ生て赤鬚蠻奴ハ
 汚辱せられんよりの算る聖像を抱て氷ハ投ぜんかと頑く吹立るも
 のハ即ち舊漢學者の法螺でひ坐います(ヒヤ)この外も未だ法螺

の種類ハ澤山ハ座いますすけれども先づ此の四大法螺を以て其巨魁
 と致します嗚呼學者先生よして今の文明社會ハ法螺を吹を業とする
 どの實ハ不可思議奇々妙々奇手列も亦た滅法界でハ座いませんか
 我々の如き正直一方の男ハグーの音も出ず唯萬歳樂く桑原くど
 常ハ兩方の耳ハ蓋をして法螺ハ吹き潰されあいやうハビクくする
 ハかりでは座いますトツコイ爾云ふ此演説も矢張り法螺の中かも知
 れません(大喝采)

滑稽贅談演説終

